

〔研究ノート〕

〈ぎりぎり〉の実践へ

——自分の振り返りと現在とこれから——

伊 田 広 行

要旨

私が〈スピリチュアリティ〉を考えるのは、自分の生き方を振り返る観点においても、次の課題としてその領域が重要だからである。このまま小さくまとまって自己満足しては行かないという危機感から〈スピリチュアル・シングル主義〉を考えた。

また、〈スピリチュアリティ〉を抽象的な観念論、巷の「精神世界論」等に墮落させないためには、自分の〈ぎりぎり〉「とり乱し」を見つめる作業が必要と考えた。〈ぎりぎり〉においてこそ、スピリチュアルな領域のエネルギーが立ち上がる。それをふまえて、私は自分の生きる方向性を確認する。

キーワード：〈スピリチュアル・シングル主義〉、〈ぎりぎり〉、「とり乱し」

目 次

はじめに

- 1 なぜ今、〈スピリチュアリティ〉か——自分史を振り返って
- 2 〈ぎりぎり〉の実践へ——自分の振り返り
 - 2-1 統合、バランスという課題
 - 2-2 僕の矛盾、〈ぎりぎり〉、「とり乱し」
 - 2-3 僕自身の個人的方針の確立

は じ め に

〈スピリチュアル・シングル主義〉については、拙稿 [1999] 「スピリチュアル・シングル——生き方と社会運動の新しい原理を求めて」や拙稿 [2002] 「新しい人権

へ」で基本発想を展開してきたが、本稿では、自分とのかかわりで〈スピリチュアル・シングル主義〉を豊富化したいと思う。最初に、自分史を振り返ることで、僕が何を問題と感じて、何を考えようとしているのかを示し、次に、〈スピリチュアリティ〉という領域に現実的に近づくには、自分の〈ぎりぎり〉を見つめることが重要であるという視点を示し、それに基づいて〈スピ・シン主義〉的に自分の生きる方針をまとめてみたい。なお、本稿と同時に書き下ろされた拙稿 [2003] 「新しい社会運動の模索——〈スピ・シン主義〉視点からの考察」も参照していただくと〈スピ・シン主義〉の理解がいっそう深まると思う。

1 なぜ今、〈スピリチュアリティ〉か——自分史を振り返って

「いいこちゃん」ってこと自体がヤバイ？

僕は、1958年生まれ。上の世代が、学生運動や政治・労働運動を行って、その挫折や限界を見てしまった世代。経済的に豊かになって、三無主義とか言われて、政治なんて関係ない、まあ楽しくやればいいじゃんっていう世代。高度成長で、いつのまにか先進国になり、モノがあふれ、それを消費していればいいと思ってきた世代。マジメに働き、結婚し家族をもち、家を買ってローンを返すことや子育てに必死だった親世代に、そのような生き方だけしかないかのように育てられ、そんな大人だけしか見てこなかった世代。先進国に追いついた70年代、金満の80年代、バブルがはじけて右往左往している90年代を生きてきた世代。だから、今の時代の空気はよくわかる。行き詰まってる！ でも、それ以外にあんの？ こうじゃない世界ってあんの？

僕は、小中・高校生とずっと優等生だった。並みの、だけど（進学校の中では成績もちよぼちよぼだけど、世間全体から見れば優等生）。モテたかったからカッコよさとか男らしさをももちろん追求したし、充実を実感したかったからスポーツ（バスケット）にもはまり、いっちょまえに、音楽や映画やファッションにもそれなりに触れてきた。

少し変わっているのは、小学校5年生のときに素晴らしい先生（^{たわだ}埴田先生）に会って、なんか、社会的というか、反体制的な広い社会的感覚をもったってことかな。社会の仕組みということ自分の頭で考えるように教えてもらった。「民主的でない日本」ということを自覚した。親も愛情をたっぷりくれて、僕をまったく自由にしてく

れ、いい先生にもたくさん出会い、そういうのをベースに、小学6年生で『次郎物語』を読み、中2で『社会主義入門』（ヒューバーマン著）に出会い、僕は、同世代がそういうことに興味がない中で、正義感の強い「隠れ左翼」的なヤツになっていた。ずっと「反体制的」な感覚が強かった。

でも、もちろん、皆から「浮く」のは嫌だったし、周りの反応に無頓着というほど鈍感とかオタク的ではなかったのだから、そういうことはあまり外には出さず、楽しくデートしたりスポーツをがんばったり、少し不良っぽくしたり、友人と遊んでた。大きな世界を感じるような映画や小説やマンガにひかれもした。平行して、誰でもないこの俺自身のアイデンティティをもちたいという衝動から、心の中で「正義」とか「民主主義」への志向を育み、時々関連本を読み、将来はそうした方向で社会を変える仕事をしよう、可哀想な人や苦しい人を助ける人になろうと思うような、マジメな、お坊ちゃんだった。

そういうわけだから学歴や受験には「批判的」だったけど、現実的に社会を変えるには力をもたなくっちゃと思って、そこそこ勉強して、普通に受験して、大学にも行った。もちろん大学を選ぶのも、左翼的なことを学ぶということが基準で、自分は偏差値としてはどこでもいけるんだが、内容的にここを選んだんだと、『赤頭巾ちゃん、気をつけて』とか読んで、少し気負って大阪市立大学に入った。大学では「社会科学全般」「マルクス主義」を勉強し、障害者運動や学生運動・部落解放運動などの人権運動的なものにも触れた。

どうしてこんなことを書いているかという、僕は、「自分は反体制的でいい人間だ」と思っていた、そしてそのこと自体が問題なんじゃないかって思うようになってきたということを言いたいからなんだ。ずっと僕はムカついていたし、まわりの奴等の思考停止や古いシステムや慣習を軽蔑していた。他の誰でもない自分に自信を持ちたかった。虫けらのように扱われたり無視されるのではなく、人から愛され、尊敬されたかった。自分で納得できるような、人格的に素晴らしい人になりたかったのだ。

しかしそれは、同時に、周りから一目置かれ、うらやましがられる人になり、リーダーになり、目立ち、NO1になり、女性にモテたかったのだ。つまりほめられ、勝ちたかったのだ（そんな風に自覚しなくなかったから気づかなかったけど）。体型が貧弱すぎるとか、顔がかっこよくないとか、そんなに賢くないとか、スポーツがそん

なにできないとか、もてないといったコンプレックスから、なんとか、そうじゃない、かっこよくなりたいとおもっていたのだ。

そのエネルギーを、「ダメな社会、ダメな支配階層、自民党、官僚、エリート」を批判し、民主的な社会への根本的変革（社会主義的な何らかの革命）が必要だと見通すことに向けていた。そしてもっと自分の無意識をみていけば、異性にもてて幸せそうな奴や遊んでて楽しんでそうな奴や専業主婦や金儲けしている人や成功している芸能人や美男美女などを、内心、自分より幸せそうなときにうらやましく思い、悔しく思い、その負のエネルギーをそうした「世間的成功者幸福者」を蔑視したり批判することとして昇華していた、勝とうとしていたという面があったように（今なら）思う。でもそうは自覚せずに、こんなに社会のことが見えていて、「正しい」ことをいう、民主的で勇気があって聡明な人間で、かつ、ダサくない「僕」だというように自分を見ていた。そうあろうと努力した。そんな中で恋愛もして、セックスもして、頭で、理屈で、「いいやつ」であろうとして、生きてた。

迷わずに生きてきたのが、本当の俺？

その後もいろいろあるんだけど、要するに、僕はずっと、「自分は、自分に恥じない人間になるんだ」とおもってきたし、それが民主的・左翼的な主張とかスタイルという形で出ていたから、悪いのは「敵」であり、「世間や慣習や伝統や宗教や保守主義者・右翼・国家主義者」であり、それを換えようとする「革新的な自分」は「正義の側」にいたわけ。素晴らしい映画や本や芸術などに触れて、自分の信じる道に自信を深めることはあっても、迷うことはなかった。世俗的なおっさんや大人や政治家や企業家を馬鹿にして、自分を相対的にマトモだとみなしていた（絶対的と思うほどではなかったけど）。自分は正しいことがわかっていて、まだわかっていない人に伝えたり教育するのが、社会をよくすることだと信じていた。十分とはいえないけど、目指す方向は正しいって信じていた。宗教を批判して、自分は科学的であると思っていた。人を差別しない自分であるとも思っていた。「人を助けていい気になる」というような低レベルではないつもりだった。「成りあがる」気など（主観的には）なかった。そんなこんなで自信があった。自分の深い内部に向かう「迷い=問い」はなかった。で、今、この本を書くにあたって考えているのは、そういう「正しさとしての自己認識」が、「自分が成り上がりたかった」ということを隠していたんじゃないのか

ってこと。

こんな言い方をすると、とつても「嫌な奴」に聞こえるだろうし、実際、そういう面も今から思うとあったと思うんだけど、「誠実であろう」としていたし「禁欲主義でなく、楽しく明るく生きたい」と思っていたから、そう「いやらしく」ないように、「古臭くない」ように、「ヘン」ではないように振舞ってたと思うんだ（後述するように、僕の僕らしさ＝実存は、もちろん単純な“いいこちゃん”ではなく、アナーキズム的だった）。

何も「心の中では本気でエリート志向でありながら表面的にはだまして演技している人ぶってた」というんじゃないくて、自分で、本気で「金や成功やエリートやお坊ちゃんやおっさん」を馬鹿にして、自由でありたかったし、ラジカルでありたかったし、優しい人になりたい、まともな人を助けたいとおもってきたんだ。つまり、僕はここで、通常と異なる「ヘンな人」だということを反省したいんじゃないくて、むしろ普通っぽくて、それでいていい奴で、エリートでありながらエリート的でないという、そんな「できすぎ君」的なこと自体が問題なんじゃないかってことを考えている（あるいは、“それが、それだけが俺か、違うだろ”っていうカンジの自覚）。

信じ込んでることは本当か

なんか、いつのまにか、「民主・人権派だからこうするもの、こう考えるもの」と浅く定型的になっていないかってこと。キレイな単純化で、「自分は、こうあるべきだ」という「理想」に気づかぬうちに縛られ、追い込まれていたんじゃないか。自由っていったくせに。「いいこと」だから縛られるなんて考えもしなかったけど、本当にそれが正直で自由で目指すべきものか、それが本当に「いいこと」か、それだけでいいのか、と深く問うのを忘れていたように思った。善意や正義や人権というときの危険性にどれほど気づいていたかってこと。「正しいこと」に知らぬ間にしがみついてて、「でたらめに生きる」ことの良さを忘れてたんじゃないかかってこと。少なくともそこでとどまってちゃ、ダメだぜって感覚。

例えば、「私生活重視はエゴで、社会のためにするのはよいこと」というのは本当か。「労働組合が組織している労働者の権利を守るのはよいこと」というのは本当か。「人助けや世直しはいいことで、そういうことを目指している人々や組織は良いもの」

というのは本当か。「左翼や野党はよくて右翼や自民党はダメ」と思っていたが、本当か。「男女平等をいう人は、仲間で、いい人だから、センスが違うなあと思える人とでも付き合っていかなければならない」というのは本当か。「政治では社会は変わらない」というノンポリが嫌いだったが、本当にそれは間違っているのか。「好きな人に誠実であるべきだから、ただ一人の恋人以外の人とセックスしてはいけない」と思っていたが、本当か。皆に事実はこうですよ、こう考えればいいですよと、考えを伝えたり、皆を鼓舞したりすることはいいことか？ 政府や資本側が貫こうとしている競争重視の路線を非難して、「昔ながらの運動スタイル」を繰り返して、その陳腐さに気付かない人たちが多いことを根本的に考え直さなくていいのか。

市民や学生や聴衆が社会運動に参加したりすることが意識が高いことで、それがいいことと思っていたが本当か？「政治を変えよう」といって、政権党を批判して野党に投票すればいいっていうのは、本当か？ 政治が大事だからやはり政治の分野で頑張るしかないというのは本当か。「政治や経済に無関心で、自分や家族の生活優先で、自分の好きなこととか仕事だけをしている人」は視野が狭い人（マイホーム主義、エゴイズム）と思って内心見下してきたが、本当にそれはダメなのか。抗議活動をしようといい、ダメな人たちを批判して、仲間たちとそうだよなといいあっていいのか？ 先生・学者として民主的なことをいってたり専門家ぶっていいのか？

サボったり、のんびりしたり、無駄なことをしたりするのはよくないことで、頑張って勉強したり仕事したり活動するのがいいことというのは本当か。庶民の現実はやはり貧しさの問題であり、だから年功制の見直しや賃金切り下げや増税や仕事の社会的意味・質を言うのは、急ぎすぎなのか。性差別や性的少数者の視点や障害者の視点を入れるというような、ひとつの運動の中に、他の運動の視点を入れるのは、時期尚早で、分裂主義で、過激すぎるのか。やるべきことがいっぱいあるから、それをできるだけすることがよくて、しないというのは逃げなのか。逆に、自分の専門とか自分の関係あるところだけ頑張っていればいいのか。

こうした問いを出すとムキになって怒る人が読者の中にもいるかもしれない。だが、僕は何も、ここでの質問で、すべて逆が正しいなどといいたいわげじゃない。深く問わなくていいのかとこの10年ほどだんだん思うようになってきたということだ。

効率発想で生きてきた奴

人との関係でも、僕は、とても大切なことを軽視して、目標に向かって効率的になるという思考をしていたように思う。例えば、僕は友達をあまり必要としなかった。ある程度の友達が必要としても、心の底から感じて交感するようなことを重視していなかったから、僕は、なんか自分ひとりで自分の問題を解決できるって感じで、友達ってことのがんがれが分かっていなかった（まあ、これはもちろん極端に言ってるけど、傾向としての話）。

人の話・悩みを聞くってときも、話やカウンセリングの基本は、目の前の人のあるがままを受け入れること、相手の感情を静かに聴くことなのに、僕はむしろ、早く効率的に結論に至ろうとしていた。時間の無駄を省きたいと思うことを背景にして、僕はそれについてよく知っていたり考えていたりして、その結論はこうだよと、急いでこちらの知識や意見を伝えて（＝押し付けて）たんだ。それが優しいことだと思って。

それは内心（無意識）では、尊敬してもらえらると思って。それは「待てなかった」んだ。「じっと聴くこと」ができなかった。相手のペースに寄り添うことができなかった。非能率・無駄だと思っていたんだ。すぐに社会の問題に変換して、個人の心のペースの大事さを見落としている面もあった。そして、それは結局、相手の自己決定も満足ももたらさなかつたと思う。

そんな奴に友達なんてできないよね。「人間の解放」とか言いながら、身近なところで、「自分の解放」がわかっていなかったし、社会問題が目の前の具体的個人の問題と繋がっていることが本当にはわかっていなかったんだ。（そしてこの問題は今でも、僕の中の、効率性至上主義の問題として残っている。）

問題の根っこは共通と思う。心の奥底で、カラダのレベルで、ばーって感じているかってこと。そこで本当に〈ぎりぎり〉だったかってこと。繊細で、気配を大事にしていたかってこと。「問い」が自分に向いていたかってこと。変化してるかってこと！

大学教員・学者ということを振り返る

それは、自分が大学の教員という相対的に高収入・安定的で、権力的な「地位」についたこと自体をどう捉えるかという問題にも繋がる。僕は1998年に40歳になり、本

も何冊か書き、これまでの「成果」の上に胡座^{あぐら}をかいていていいのか、という問題をその前後から考えるようになってきた。「自分の書いたものが印刷物になる」ということの「権力」性を忘れて、たいしたことでもないのに書いていい気になっていないか。僕の第2の人生（後半の人生）をスタートさせる段階に来ているのではないのか。多くの先生・学者は「社会に役立つ研究して学生や世間にちょっといいことを言えばそれでOK」と思い込んでいる。でも僕は、肩書きや収入にしがみついていないといえるだろうか。大学や会社に従属する組織人に成り下がっていないか。社会批判的なことを口先で言ってるけど、社会はほとんど変わってないじゃん！ 何、大学の先生とか活動家って、自己満足？ 僕はそうになってない？

論文を書いているが、本当に役に立っているのか。業績かせぎになっていないか。有名になりたい、学者としてほめられたいと思っていないか（学会というギョーカイでの出世指向？）。人よりも、「賢い、ものが見えている」というエリート意識はないだろうか。自分がたいした奴でないということを忘れていないか。分からないことを分からないと認める誠実さをちゃんともちつけているだろうか。テレビや言論界でわけ知りに語っている人たちと同じようになっていないか。

学者っぽい論文を書かずに、自分や友人が読んでびたっとくことを基準に書こうとしてきたが、それに満足していないか。「その人にとって必要で、分かりやすく、わくわくして、共感できるいい授業」を少しはしているつもりになっていたが、そんなやり方が本当にいいのか。他者に正義を語り説教していないか。理屈が先立つ人間になっていないか。自分の矛盾や弱さを語らず、客観的に自分の外部のことを語っていないか。先生といわれて、いい気になっていないか。「若い、先生っぽく見えない」といわれていい気になっていないか。

いつも、自分が「正しい・客観的」と思うことを学生や聴衆に「教えて」いるのではないか。つまり「いい先生」になろうとしてかまいすぎているのではないのか。他の人を自分の目的にそって変えよう（洗脳しよう）としていたのではないのか。自分が信じる確固とした理想とする方法・内容で相手を解放してあげよう、導いてあげようとする姿勢があったのではないのか。あるいは学問の伝統にそって「客観的に知識を身に付ける」ようなことを再生産していたのではないのか（東大的！）。民主主義とか人権とか自立といいながら、それらは矛盾なのではないか。そんな古いスタイルでいいのか。

安定した地位と高い自分の年収を、パート労働などの低収入・不安定性と結びつけて考えずに、この格差は当然だと思ふような鈍感さと傲慢さ。あーあ。「人のフリ見て我がフリ直せ。」

とすれば、自分が為すべきことは？ 今のままでいいのか。

学問というもののもつ、いやらしさ

「学問」というものの性質自体の面からも、考えるところがあった。

外国（他の学者）の権威にすがってそれを紹介するだけの「横縦学問」のままであったり、過去の凡庸な分析であったり、少しお勉強ができる程度の頭であることを示すだけであったり、ちょっとひねくれた相対的視点を提示して、結局は現状を何も変えずに秩序に居座っている学者がどれほど多いことか。そこまでひどくなくても、たいした研究でないことや自明なことや重箱の隅をつつくようなことや趣味的なことを書いて自己満足してるものはたくさんある。自分はそうになっていないか。自己弁護のための口先だけのきれいごとになっていないか。勝ち負けや知識披露や自己満足が目的となっているような「学者的議論」の仕方になっていないか。

自分自身の抑圧・よろい・権威主義に気づいていない学者がほとんどであるような学問。自分の外側に「知識」をつけるようなスタイル。

一般的にいてて学者も世間も、「学問＝科学＝客観的＝価値中立・中庸＝正しい」という図式を信じ込んでいるという問題に加え、経済学、社会学、法学、政治学といった僕が関わる学問分野での仕事に、限界というか狭さを感じてしまうことが多かった。一部には有益な素晴らしい「研究」もあるが、そうでないものが多いし、僕でなくても他の人がやるだろうという類のものも多いように思えた¹⁾。そして過去の「体

1) このまま学者っぽく、外国文献や関連論文を読み、統計資料を加工して自分独自の主張としてまとめ、学会でそれなりの評価を得るのは時間さえあればできるとおもった。しかし、僕はそれほど「マジメ」でも「賢く」もないので、それをすごく短時間にはできない。まあ、やる気もおこらない。誰か他の人でも同じような結論に至ることを主張するだろうという予測。また、僕が指摘したことが、時間がだいぶずれて、徐々に社会の多数派の見解になっていくという「遅さ」もダルかった。最後の詰めは、職人的専門家なら誰でもがやるだろう。僕でなくてもよい。とすれば他でもなく、この僕がそれに時間をとられて他のことができなくなるということでもいいのかという判断が必要となる。それが一番僕のしたいことか。それが優先順位のトップか。と考える

系・方法」にしがみついた、どうでもいい「研究」やただ学問的な言語・手法を用いただけで結論がたいしたことのないスケールの小さい「研究」、目先の問題だけを狭い「現実主義的」枠内でどうするかというだけの技術論的な議論などが実はほとんどで、「分析」はあってもだからどうなのかという結論（今後の政策提起や改変プログラム）も社会的責任も意識していない。自分を棚に上げて、「客観的」と称して「自分を除いた“社会”を外部から偉そうに調査・観察し、代弁したり批判したりする」ようなスタイルの狭さと根本的欠陥に気づかないという鈍感さがあふれていた。

大きな世界全体を視野に入れて自分の専門を超えて思考するのでなく、「自分の専門はこれですから」といって、狭い専門分野での研究や分析に自己限定する消極的な姿勢をよしとする態度（謙虚さのフリをしつつ、それこそが専門家なのだという自慢の気持ち）。総合的知識は底が浅いものと軽蔑し、自分の専門については自分がいちばんわかっているという思い上がり。研究室や大学内・学会内にこもり、社会の中の大学や学問の役割や、ひとりの人間として「これでいいのか」ということをラジカルに考えない視野の狭さ。「自分のことや未来を語ることを禁欲してきた」とエラーゾーンにあとがきに書く学者がいかに多いことか（アホか!）。「科学は探求本能に根ざす知的なプロセスであり、人類の崇高なる活動だから、即物的に人類の役に立つ必要などない」という思想が幅を利かせている世界²⁾！ 本当に相手（学生・聴衆）が必要なこと、相手の成長を考える参加型の教育を考えるのでなく、啓蒙的なことを反省せず、教育よりも研究を上位と思いつつ、研究至上主義！

なにより表現・学問するときに「躊躇・迷い・ためらい」といったものがないということのダメさがわかっていない感じがした。自分の話し方、思考方法、存在の仕方自体がとても狭い偏ったスタイルであるとの自覚がない鈍感さ。インテリ独特の、たいしたことといってないことを隠す話し方のくどさ！ 自分がたいした人間でないということが分かっておらず、プライドばかり高くて、現実の人間への影響を感じることもできていない、幼児的万能観のインテリ版。

なら、そうしたことは他の「学者的」「官僚的」「実務的」な人に任せて、僕は僕が一番したいことをして、一番考えたいことに時間を使いたいと思った。

- 2) 「科学は探求本能に根ざす知的なプロセス」などという根拠のないことを「本能」などという言葉²⁾を安易に使って平気で言えるほど、学者は思想的に科学的素養を身につけていないのだ。

そうした鈍感さが、「学問」の無効性や権力性・反動性にさえ気づかないという哀れな状況をもたらしていた。(自分も含めて) 学者が自分の主張を通すために、論理的な装いをもって批判したり割り込んで議論するスタイルも、競争的で、否定パワーカー的・男性的で、それでいて現実の見えにくい部分(力を奪われた人々の痛みや悔しさ)を知らず、深いレベルでの「論理の飛躍」だらけで、悪い意味で抽象的で、そして何か精神上の崇高さや品格がないと感じられた。

また、スウェーデンのようなベターな社会にしたいのに、どうして日本では社会民主主義が広がらないのか。その深い理由を総合的に探ることなしには、僕の「研究」は深まらないと感じていたが、いわゆる「学者の学問」にはそうした実践性といった特性があまりないように思えた。この問題を考えるとき、多くの学者という人々の“タイプ(実存)”には、魅力も可能性もまったくなかった。人間として、器の小さい人が多いと感じられた。狭義の科学的学問を超えて、宗教や芸術や社会運動の領域との関係を考えざるをえなかった。

このままではだめ？

そんなこんなで、「現状維持=保守」的になるのはつまらないなあと感じはじめていた。生きる上での態度として、守りの姿勢になっていないか、という問いをもつようになっていった。それは人生のランクアップあるいは軌道修正をもたらす必要を感じはじめたということ。一方で少し歳をとって体力も落ちてきた。あれもこれもしたい、政治や学者のありように不満だらけ、あらゆることに発言し行動し変えていきたいということから、徐々に、すべてはできないや、死ぬまでにこれだけは優先しておきたいと思うことは何かと、考えるようになってきた。短い人生の中で、最もやるべきことは何か、一番したいことは何か、シングル単位論を書いた「次」は何か、を考えないと、「つまらない」というか、時間がどんどん過ぎていくという「あせり」のようなもの。同じこと繰り返していいいの？ それがしたかったことだっけ？ 俺って何？ 自由に生きたかったんじゃないの？ もっと「社会に貢献する行動をとることが必要」ということについて考えを整理したくなった。

振り返れば、僕は小学生の頃から、かなりアナーキーな面ももっていた。みんなと同じがいやで、自分が「なにものか」でないと満足できない面があった。何で漢字を覚えなあかんねん、英語をせなあかんねんと反抗していた。振る舞いなりファッション

ンなりでも、ただの優等生やお坊ちゃんに見られるのがいやだという意識を強くもっていた。だから男らしくスポーツができることを追求し、リーダーになり、学校をサボったり、少し悪ぶったり、男友達と逸脱するようなことに力を割いた。20歳を過ぎたあとも、一方で上記したような「まじめな生き方」の面をもちつつも、常に隠れた「欲望の面」をもっていた。彼女と遊んだり、「いかがわしい文化」や「マイナーな文化」に触れたり、何か粋にはまらない自由を追求したいとおもっていた。品行方正というよりも、明らかに二面性があり、欲望に忠実だった。だが、そういった闇の豊穡さ——「混沌の闇世界」——の面は、やはり僕の中では、オモテの面（理論、理性、正義、あるべき側面）と切断されており、その意味で、その豊かな世界を十分総合的統一的につかんでいなかった。

だから、30歳代後半に、ある程度「オモテの面」の成果を達成した後、次の課題として、よりランクアップした人生や世界への向かい方に目が向くのは必然だったんだと思う。

そこで、再度根源的に問い始めた。なにが貢献なのか。どのような運動がいいのか。社会に貢献？ きれいごとじゃないのか。社会を本当に、今までのやり方で変えられるの？ できそうにないじゃん！ もっとしたいことがあったんじゃないのか。このまま同じことやってたらつまらないなあ。「学者」ってカッコわるいなあ。あんなふうに歳をとりたくないなあ。セクシーじゃないなあ。有名人でも死んでいったら、なんてことない、ただ、人がひとり死んだってことで、そんなもんだよなあ。そんなふうに「あせって頑張る」ってことを相対化する視点が徐々に強くなっていった。

これは、「老い」という問題を考えはじめたということでもある。まだ40代前半なので、あと10年や15年、今のままで頑張って走りつづけようと思えば走りつづけられる（だろう）。でもそれでどうなる、という感覚がある。「若さ、元気さ、頑張り、闘い」を基準にしたままでは、いずれ、人生後半のヨリ根本的な問題に直面する。人生全体のデザインを考えないままの人が多すぎるから、あとの世代はまた同じような徒労を繰り返し失敗を積み重ねているという気がする。もう少し、大きなビジョンをもって皆が生きて総括して次の世代にわかったことをバトンタッチしていかないとなんじゃないのという感じがある。

なんか、直感的に感じた課題

そんなとき、芸術的表現・生き方に惹かれると同時に、周りの情報として、ニューエイジ的なものや宗教的なものがとても多いことに気づく。僕が心を動かされる作品や人には、あきらかに勇気とかスピリチュアルというようなものが共通して、ある。そこをどうつなげて考えるか。宗教や霊だの神秘だのという領域をどうするか。以前は馬鹿にしていたけど、それでいいの？ 多くの人に影響を与えているじゃないか。でも、やはり無力とも反動とも感じる。

そもそも、僕は、伝統とか慣習とか世間の人々の「非合理性」がおかしいとおもって、徹底して合理的に考えることを主張してきたんだよね。保守派が宗教や伝統を使って俗受けするような、いかげんなことを振りまくのが嫌で、理性的・科学的な対案を主張していたんだ。それ自体は、やはり今でも有効な面があると思う。では、合理的であるという積極性を維持しつつ、どのように、その合理主義の不足やマイナスを思考に組み込むか？ 徹底して合理的に考えると、見えてくるのは、合理主義の「足りなさ」——感情、身体、〈たましい〉などの領域——だが、それをどう組み込むか。

古い運動スタイルのどこがダメで、どこは大事なのか。生き方・社会運動・教育の新しい原理を求めて、それも含めて、根本的に考えてみたい。とにかく、このまま、古いスタイルの上で「いい人」「フェミニスト」「大学の先生・研究者」「市民運動活動家」しててもだめだ。満足できない。僕らしくない。アナーキーだったあのエネルギーを切断したままじゃ、絶対、違う！ それだけは間違いない。

僕が、自分の半生をこのように振り返るところまで来たということが、大きな《転換》だと思う。つまり、人助けをしたい、自分は正しくていいやつだ、保守を批判して自由に生きてる、というような「プラス」自体を、相対化するところに、徐々にだけれど今ようやくはっきりと、来た。20、30歳代を通じて、いろいろ考えてきて、ようやく、どうもここらが問題だぞって、30歳代後半に徐々に見えてきた。それが、「社会の仕組み」とか「敵」とか「保守・右翼・資本家」だけが悪いんじゃないということ。豊穡ないかがわしさを、隠したり別のものとしておくのは間違いだ。自分も、この社会の聖俗分離秩序に組み込まれ、エリート的で、男性原理的で、エゴ的で、能力主義的で、若さ中心主義で、成り上がり志向があって、肩肘をはって、異性愛

中心主義で家族单位的なやつであった、今の秩序を裏側から支えていたというようなことが見えてきた。

差別をする人間にはなりたくないと思いつつながら、実は鈍感で、自分が感じる範囲だけで語ってきたのであり、人の痛みを深く感じる力が少なかったことに目をつむってきたのだということ。自分の信じる確固とした「正しいこと」を、相手のためを思って、指摘したり指導したり教育したりするという「間違い」「いやらしさ」がよく見えていなかったこと。自分自身が、競争や比較や金や権力や名声や商品や所有や成功やカッコヨサやコンプレックスに囚われ、体も心もこわばり、不自由なのに、それさえも自覚できないほど“抑圧”されているのだということ（それこそが“敵”だ!）。それが言葉や表情や動作の端々ににじみ出ていること。

とすれば、何をしたかったのか、どんな人になりたかったのか、そういうことを根本から見つめ直すことが必要なんじゃないか。そんなことを直感的に徐々に感じ、「弱き者」「いいかげん」であるということの意味が見えてきた。「躊躇・迷い・ためらい」が出てきた。迷い、ダメなところがあり、言い切れず、「弱い」「元気がない」ということが大事なことじゃないかと思えてきた（そうでない、売れ筋の、元気のいい、自信満々の、挑戦的な、わかったような語り方が嫌いになっていった）。その瞬間、瞬間の関係自体の意味が見えてきた。「学問」「学者」ということ自体がなぜダメなのかもみえてきた。「シングル単位論」で言いたかった、僕自身の奥底に流れていた直感的な“あるもの”をもっと明示的にしたいと思うようになってきた。「ああいう人にはなりたくないな」という直感を、確固としたものとして説明し、自分を振り返りたいなとおもった。

そういうことが、合理的な話だけじゃない、ややこしい領域（混沌の闇世界、くたましい）などをちゃんと扱いたいなという気持ちにつながる。今の日本社会は政治的にも経済的にも行き詰まっているし、人権意識もモラルもすたれ、いやらしい感覚が満ち溢れているが、それは、社会や保守派の問題であるだけでなく、学者や民主派・良心派や僕自身の問題であったのだ。光も闇も見なくっちゃ。僕を突き動かしてきたものは、今の資本主義社会の強者への怒りと「弱者への共感」であると同時に、合理的な思考だけではなく、混沌の闇世界の意識でありくたましいであった。ここを

深く扱わずには、僕の人生は、小学校以来の「埜田先生に恥じない、ちゃんとした人になる」という「目標」を成就することができない失敗作になってしまうだろう³⁾。えらいこっちゃ。

2 〈ぎりぎり〉の実践へ——自分の振り返り

2-1 統合、バランスという課題

〈ぎりぎり〉と「とり乱し」へ

〈スピ・シン主義〉の視点から自分を振り返ってみるとどうなるかという視角で、〈スピ・シン主義〉論を豊富化してみたい。深層意識という奥深いところにある、みえないものである〈たましい〉というものは、口先でなく、〈ぎりぎり〉で出るものである。そういうものがとても大切なんじゃないかというのが〈スピ・シン主義〉だ。では、その〈ぎりぎり〉とは、何か。

それは、口先でなく行動や体が示すホンネ部分を見ること、自分の闇や弱さや汚さという認めたくないもの、見たくない部分、無意識に追いやっていた部分までみて、自分の矛盾を具体的にみつめて「何かサムシング」を見出すことだろう。これは田中美津さんが「とり乱しの生き方」とっていた視点⁴⁾に近いと思う。

3) 僕が自分の「自信過剰」「できすぎ君」的なことを問題としているからといって、「ああ、自分に自信がない庶民の私たちには関係ないわ」と受け取らないでね。逆だよ。〈スピ・シン主義〉は、「エリートの人が少し反省したのね」というような、「普通の人には関係ないテーマ」を扱っているのではなく、読者であるあなたもそして僕も共通に陥っていた、ある種の「見えなかった問題」に“直面”しようとする“試み”だから。宗教やニューエージも、安易に近代社会に寄生してた点では、同じく「見えていなかった」、そういう皆が前提としていた水準自体を問題とするという根源的な試みだから。

4) ウーマンリブの代表的活動家、田中美津さんについては、森岡 [2001] が田中美津論として詳しく批評している。ウーマンリブの積極性については、拙稿 [1997] を参照のこと。

なお、「とり乱し」は大事であるが、日本の社会運動の一部にみられる非合理主義のマイナス面は確認しておきたい。うるさくて、自己中心的で、勝手に、相手のいうことに耳を傾けず、白か黒かを言い切るような強引さがあって、他者否定的で、否定のエネルギー（攻撃的）で関わるという面は批判されるべき側面だろう。主観的で、バランスが取れていない、ただの非合理的な感情ぶっつけは、繊細さや謙虚さがなく、鈍

「とり乱し」とは、自分の抱えているタテマエとホンネの間の矛盾に気づき、おろおろする状態のことである。自分の内面を直視し、みずから「とり乱す」ときにはじめて自分の深い本当の姿に出会い、また他者と本当に出会えるのだという⁵⁾。言い換えれば、頭できれいごとを言うのではなく、またその逆に思考を停止したり理想を捨てて俗に走るだけの居直りでもなく、自分が会いたくないような人に会ったり、経験したくないようなことを経験して、思いもかけないことに巻き込まれ、自分でも自覚していなかった自分の整理のつかない、矛盾した状態であるという、そういう自分の「本性」に出会い、自分が変わらざるを得なくなる、自分の偽善や矛盾に気付く、何かを学ぶというようなことである。

僕も、自分の無意識が暴かれるように、〈ぎりぎり〉、意外性、計算外、「出会い」へ行きたいと思う。

僕は、〈スピ・シン主義〉で、社会運動をこんな風にしていきたいということも言うが、同時に、日常生活をこんな風に生きたいということも大事にする。僕は今まで、講義や講演ではある部分話し、本には一部を書いてきたが、それはそれでいいと思ってきたからだ。だが、そろそろ「次」へ行きたい、行かなくっちゃという感じになってきた。そうすると、〈ぎりぎり〉と「とり乱し」を実践しなくてはならないと自分でも明確に自覚した。

以下、この節では、僕なりの〈ぎりぎり〉をさらして、そこから「次」へのエネルギーが出てくるという〈スピ・シン主義〉の実践を例示してみたい。

アナーキーな希望へ

未来は確定していない。そこに自由がある。〈スピリチュアリティ〉に希望がある。左翼も知識人も、なんか、したり顔で分析し、語れば何とかかなとおもっていた。でもそうじゃないという無力感、諦念、諦めは、成熟した世界観の必要条件（前半部分）として大事だ（十分条件ではない）。

コントロールできないことは多い。運、不運、不平等はある。しかし、絶対的に決

感で傲慢な姿勢であるが、そうした側面が与野党、左右を問わず、社会運動においては出がちである。自分の「正義」に酔ってしまう側面である。

5) 森岡 [2001] p 216-7

まっているのではない。そういうアナーキーな認識がいる。結論、結果、未来は開かれている。それは、努力すれば成功するとか、思っていれば実現するとか、というような安易なものじゃない。

しかし「夢をみる力」は必要だ。夢という結果・形が大事なのではなく、夢をみてそれに向かうエネルギー充実感に幸せがある。その瞬間を生きたいということ。アナーキーな希望をもつとはそういうこと。

〈スピ・シン主義〉は、理性と非理性の統合

「他者とは別の人、分かりあえない」、「世界は合理性で成り立っており、人の行動原理も、実は、自分の欲望を満たすための合理的行動に過ぎない」という面がある。多くの人の生き方をみていけば、結婚や仕事や人間関係も、結局、自分の損得じゃない、なーんだって面がある。(この面を〔A〕とする。)

しかし人はくたましいで繋がっているという面もある。世界には、理性の世界に〈裂け目〉がある。生と死のとき、その〈混沌の闇世界〉の世界に触れやすい。人のため、家族のため、社会のために自己犠牲的に行動する人はたくさんいる。突き動かされたように人が動くとき、そこには、損得では測りがたい、言葉にならない、感じるエネルギーがある。僕自身が、みずから感じるリアリティの総体は「理性世界の範囲」よりずっと大きい。元気が出ないとか、緑内障とかセックスとかという〈ぎりぎり〉に接しても、みえてくるのは自分の奥底の“何か”だ。(この面を〔B〕とする。)

この〔A〕〔B〕2つの関係をどう捉えるか。〔A〕を一面的にいうのが狭義シングル単位論のマイナス面であった。〔B〕だけを一面的に浅く言うのが共同体論のダメなところであった。〈スピ・シン主義〉はその統合を目指している。その「統合」とは、全体性の回復とも言える。では、その「統合」の具体化とは？

聖と俗のバランスをどうするか

その「統合＝全体性の回復」という課題は、次のようにも言い換えることができる。僕は、ホンネで、〈所有せざる者〉へいきたい、スピリチュアルに生きたいと思っている。しかし、俗・悪・闇・混沌の闇世界を認め、所有も含めた欲望を非禁欲主義的に肯定したいとも思っている。ホンネとタテマエの分離とも言える、この両者の統合

を、「社会構造が悪い」などという一般論でごまかしちゃあだめだ。

その統合を、理論的には、「欲望の拡大、質的深化、自己領域の拡張」によって、〈スピリチュアリティ〉へ欲望を昇華させるということで、まとめてきた。

この考えをいかに深く消化して、自分の身体に染み込ませるかが課題だ。このとき、〈たましい〉という概念をきれいごとにして、「俗・闇」を消してしまうように理解すると、ダメな宗教と同類の道徳論になってしまう。で、そうならない要諦が、矛盾したままの自分を、そういうものとして認めるということだ。

自分は、俗っぽい面をもっている。誉められたいし、好きになられたい。スケベーだ。楽しい。しんどいことはしたくない。努力もしんどい。いやな仕事はしたくない。すべきことはいっぱいあるが、諦めている。逃げています。金にセコい。他の動物を殺して、痛めて、命をもらって自分は生きている。他国の人の貧困や人権侵害の上に、鈍感に生きている。

それらを認めることができる。そうではないようになりたいと思いつつ、そうは完全にはなれないという矛盾に向き合い、そして、そこでとどまらずに、そうした自己認識を通じてそれでも少しずつでも高みに向かうというバランスに希望があると思う。

きれいにまとめすぎていた

程度問題だが、〈スピ・シン主義〉という観点からこれまでの僕のマイナス点を振り返ると、僕は、きれいにまとめすぎていた、といえると思う。先走りすぎ、すっきりしすぎ、合理的にみすぎ、割り切りすぎであった。自分の弱さとか、矛盾とか、言葉にならない思いとか、直感とか、リアリティとか、はちゃめちゃとか、アナーキーとか、人目を気にせず好きなことをするという面で、足りなかった。自分の闇を自覚していなかったし、語っていなかった。政治的影響を考え、個人的な矛盾は出すべきでないと考えて行動している面もあった。

少しは、その逆の傾向もあったよ。だから、こんな生き方をしている。シングル単位論などを語ってきた熱意の底にある〈たましい〉に気づいたんだから、前から、その傾向はあったよ。シングル単位論の文章にもその片鱗はあちこちで出ていたはずだ。自由を求めてたし、アナーキーなものが好きだった。だからブルーハーツの感じ、だった。半分は、自分の生き方としては好きに生きてきた。だから僕の周りの人の僕への印象は、「好きに生きていてええなあ」というものが多かった。

でも、自由はあったけど、安定の上でのもので、「次」を求める今となつては、過去のものだ。僕は自分でもその「自由」なつもりで、無意識のうちに小さくなっていた。〈スピ・シン主義〉論で突っ込んで考えていこうとする、混沌の闇世界の領域の諸点を十分に意識していなかった。田中美津さんが強調するような「とり乱し」関係論を入れていなかった。むしろ、そのめちゃくちゃで、主観的で、非合理でぐちゃぐちゃな感じが嫌だった（注4参照）。共同体主義の抑圧を嫌うから、人と人の距離感を大事として、距離をとる方ばかりを強調してきた。シングル単位にはそういう傾向があった。

そうした主張の意義は今でもあると思っているが、ここでは、僕の喪失、思い通りにならないこと、つらさ、いやいや、無理すること、理想的でないなどという「僕にとっての他者」との出会いを見つめていくことの重要性に気づいたということを考えて深めていきたい。それが〈ざりざり〉の視点。これがないと、やっぱ、だめだよねえ。

2-2 僕の矛盾、〈ざりざり〉、「とり乱し」

男としての抑圧——ふりかえり

僕は男性的だったなあとと思う。左翼的で、世界の平和とか差別のない世界とかは本気で求めていた。しかし、僕は、自分を男性と意識し、他者を女性か男性かでいつも区分し、若いかな、きれいかな、有能かな、おもしろいかななどで人を区分してきた面が本音（深い部分、無意識）ではあった。男性の有利さの上に生きてきたし、同じように、勉強ができること、学歴があること、スポーツが少しできること、身長が高いこと、貧乏でないこと、彼女がいることなどの「余裕」の上に生きてきた。そういう面があった。

なにより、能力主義には深く囚われていた。先に書いたように、優等生的であり、先生的であり、論理・理性優先主義であり、頑張らないといけないと思っており、自分と戦わない＝頑張らないのは負けだ、弱いことだ、逃げだ、と思っていた。「弱みを見せることに抑圧的・警戒的」という性格をもっていた。頑張れる自分を肯定的に捉えていた。今の競争社会の影響を受けて、僕はエリートでありつづけた。そのため、「負ける」ことに慣れない人間になった。自分に自信があったが、それは、「勝つ

て」いたからだ。「負けなかった」から人に弱みを見せて助けてもらう場面がほとんどなかった。自分の間違いや失敗を素直に認めるといわずでなく、「言い分」を上手く言うことができるような奴だったし、事前に「後で言い訳」しなくてもすむようにもっていけるようにする奴だった。自分で自分のことを正しいとかイイ奴と思っていたし、あることを理屈・理論・論理によって正当化して安心するタイプで、それで十分証明され、正当性があるとおもっていた。理屈・理性に自分を従属させていた。大きな理論に負けていたのに、そこに寄り添っていたのだ。

また、僕は自分のからだとか心の奥のほうの言葉になりにくい、非合理的な部分に無頓着だった。そこから発せられる声に繊細じゃなかった。無理して平気だった。それが体力あることと思っていた。頑張りだと思っていた。30代後半ぐらいから、体力的にも弱くなってきてから、体の声を徐々に聴くようになっていった。

こうした僕の「限界」は、その主張のシングル単位にも反映されていた。シングル単位論は、自分が差別や抑圧に加担しているという「自分の加害者性」とか、自分のだめさを見つめる側面の強調が弱かった。そこを課題の中心においていなかった。解放像としての先の方は描いたが、自分の足もとの出発点のエネルギーを重点にしていなかった。自分の足もとの矛盾、ぐちゃぐちゃに関心を置いていなかった（隠し味としては記述していたが）。だから「強者の論理」のように受け取られやすかったのだろう。

つまり、僕は、強さ、競争、理性の人で、ほんとに男性原理的だった。で、もちろん、フェミで、シングル単位をいう中で、僕が、そういう自分を徐々に変えていったという面はあるんだけど、でも、なんか、いい人になって完成したのかというと全然なわけ。実はもともと、いろんな社会運動や映画などの話に感動し、社会悪に怒るといふ僕の前動力は、僕の〈たましい〉で受信していたってことなんだけど、そこを理論的には深めていなかったわけで、それは従来の良心的近代主義者の限界そのものということ。この課題はとて深かったわけ。だから、僕が自分の体の感覚、身体性を取り戻すこと、もっと深く〈スピリチュアリティ〉というものに挑戦することが、僕の次の闘いなんだ。

上記のように男性原理的であったが、そうでない矛盾した面も実はいっぱいあった。恋人がいないときもいっぱいあったし、能力や容姿に自信がないときもあって、コン

ブレックスも抱えていた。論理だけじゃないと思って、映画や音楽や絵画やいろんなものが好きだった。人間を好きになる点でも、直感で、優等生的でない人、スピリチュアルな人が好きだった。自由に憧れ、サボり、矛盾し、気持ちいいことを追求してきた。マジメじゃない面をいっぱい隠し持っていた。人にはある一面だけを見せていた。だから僕を知る人は、局面によって印象がいろいろ違っていただろう。

そんな僕が、それでも、やっぱりオモテ・中心部分では、サブの面と切断してしまっていて、十分つなげて全体的に考えずに、昔の左翼的な、先生的な「強さ、競争、理性」の人だったということ、どう乗り越えるかが課題なのは、間違いない。今までの矛盾した分断の状況の放置を、もう放置しないで見つめるという課題。これは、近代主義の広義社会運動をどうするかということと同じ根っこの問題だから、大事な課題だと思う。

きれいごとでなく、バランスへ

でもそれを、また口先で、理性偏重を批判し、身体性を大事にとか、環境保護、女性原理や〈たましい〉を大事にとか言うのは欺瞞だ。言うだけなら誰でもできる。そんな簡単に実行できるわけじゃない。そんなに簡単に僕は近代合理主義に凝り固まった自分を根底から変身させられない。僕だけじゃない。多かれ少なかれ、みんな「強さ、競争、理性、お金、世間的地位」などに囚われてるし、能力主義や優生思想に囚われてるし。女性だって、もちろんそうだし。スピリチュアルレベルでの受容性どころか、攻撃的な人は多いし。それが現代社会に生きてるってことでしょ。だから口先できれいにだけ言うのは、ゼーンゼンだめ。社会運動を根本から変えるというのも同じ深い問題だから、簡単じゃない。

環境を大事にというのが、貧乏生活できるのか。農業生活できるのか。環境のために生きるってたいへん。ジャマクさい。そのホンネを見つめないと。古いスタイルの主張なら簡単なんだけど。で、僕は〈スピ・シン主義〉論で、そのバランスを書きたいと思った。

人間が身体、理性、感情、スピリチュアルな領域から成り立っているように、世界も大きく分けて、言葉の世界と言葉にならない世界でできている。どちらかという言葉で「考える」世界中心だった僕が、言葉にならないものを「感じる」世界に視野を広げようとするのはまっとうなことだろう。

しかし、「感じる」だけでいいのではない。「考える」ことは捨てられないし捨てるべきでないことは明白だ。だからそのバランスが問題。その実践の一つとして、僕は、スピリチュアルな領域に言葉で近づいていこうとしているのだ。それを〈スピ・シン主義〉とっている。2つに分けて並列させるだけでも、一方だけを持ち上げるのではなく、ストライクゾーンからぎりぎり出て行くような、審判の手が判定に迷ってぶるっとするような、そんなボールを投げようとしているのだ。

だから、シングル単位論だし、社会的行動もいるし、スピリチュアルなことを大切にしたいけど、そこに上層建築批判を入れ、混沌の闇世界を見つめて、自分の闇とのバランスを描きたいと思った。僕はまだ途上だ。〈スピ・シン主義〉を求めて、十分実践できていない時点での、自分の「とり乱し」の報告をしたいと思う。そうして僕は「次」へ向かい、また数年後に、「さらなる次」を求めていこう。その連続もまた、〈スピ・シン主義〉的だと思うから。完成はない。

原動力としてのエネルギーは？

〈スピ・シン主義〉では、「アート」が希望の方向だという結論になってる。それはそうなんだけど、この概念はとても広く、通常受けるイメージで言うなら、アートなんていうと専門的才能ある人っぽかったりインテリっぽかったりして、ええカッコしいの面があると思う。僕自身が、燃えるもの・充実感のあるものを探して生きてるわけで、そのとき多分「アート」的なものが「次」だろうとは思うんだけど、そこには「カッコいい、売れる、尊敬される、センスいいといわれる、注目される、評価されたい」という欲望、ある種のエリート、トップ（頂上）への欲望が潜んでいる面があることもみておかないとナと思う。これはつまり、能力主義とか優生思想の面がないかどうか、常にチェックが要るぞってことだろう。

で、それがあれば、僕は、ええカッコしいやいかがわしさも含めて、ばっとエネルギーを発露するような生き方、表現のしかたをやはり追求したいと思う。思えば、アートのエネルギーギッシュな“熱さ”が、これまでのシングル単位の主張には少なかったなとおもう。落ち着きすぎた。あれでも学問的過ぎた。

病気になって、障害者問題を身近に考える

病気も自分の無意識部分を照らす大きな契機だ。僕は2年程前の2000年に緑内障ということがわかり、治療してもよくなることはない病気なので、そのことは僕の考え方にも微かな影響を与えた。13年程前はガンにもなったので、それも振り返れば、僕の世界観の変化に影響を及ぼした。

緑内障の方で言うと、この病気は、進行の速度が問題だ。遅ければOKだが、速ければ失明だから怖い。僕の場合、1年の経過をみて、少しずつ進行して見えない範囲が広がりつづけていたので手術することになり、失明の可能性ということに、徐々に向き合わざるを得なくて、手術する前も少し不安だった。

手術をする前に、医者との会話の中で、「何年、目はもちますか」と聞こうかと思ったが、怖くて聞かない（聞けない）という経験をした。ここから、ガンなどの告知問題も、ほくは単純に考えすぎていたなと実感した。今でも僕は告知してもらいたいと思うが、皆がそうかという、その人だけでなく家族との関係もあって、心配かけまいとして「気づいていない」という演技を病人当事者が選択するもあるし、自分でも無理にでも「死ぬほどじゃない」という幻想に浸っておこう選択もある。統計でも、後何ヶ月のいのちと聞いて自分でもうダメと思った人ほど早く死ぬらしい。余命予想を聞かずに、自分は大丈夫と思って楽天的に生きてると回復する、あるいは長く生き延びる傾向もあるという。

単純化するのには愚かと分かった。人生の残り時間を知って、自己決定的に有効に使うというのが原則だが、しかし、僕自身が、怖い事実は知りたくないと思ったのだ。元気になるような事実なら知りたいが、そうでないなら、曖昧なままにしながら、しんどいことは考えず楽天的な気分でもって、がんばるという選択もあると知った。

緑内障の手術のために入院して、そこでいろんな人に出会って、そこから考えたこともある。失明に近い状態になって、もっと早く発見すればよかったと悔やんだり、適切な対処をしてくれなかったと医者を恨んでいる人もいる。もっと早くこの先生に出会ってこの病院にきていればよかったと嘆く人もいる。ほとんど両目が見えなくて他人に手を引っ張ってもらわないと歩けない人もいたし、片方の視力が完全になく人や、ほんの少しの視野しか残っていない人、下が見えないから階段が怖い人などいろいろだ。字を読めない人、人を識別できない人、テレビが見えない人。不安を語る人もい

た。でも程度のとても軽い人もいるし、病状が重くても、気楽に生きている人もたくさんいた。自分より後に手術する人を気遣い、現代の手術治療水準は高いから大丈夫だと励ましてくれる人もいた。多かれ少なかれ不安はあるだろうが、それを考えないように、表に出さないように、あるいは自分を元気づけるために、明るく振舞う人が多かった。したたかにみんな生きてるなと感じた。

病院でほとんど視力のない人を見たときに、つらい気もちを強く感じた。検査技師の人が目の前で手をふっても見えないと言っているのをみた。目の前10センチで「C」の記号を見せてもどっちが空いているかみえないと言っていた。ああなるのかという思い。今までやはりわかっていなかった。今も、もっとしんどい人のことは何一つわかっちゃいない。

そのなかで考えてみえてきた〈ぎりぎり〉を書いてみたい。まず、きれいごととは言えないなという、本音への気づきがあった（この点を〔X〕とする）。失明するという障害をもつということに対して、差別（障害者はダメ）というより、自分の不便、自由の低下としてつらいなと実感した。旅行できない、移動できない（とくに新しいところへいけない）、走れない、性的不便（オナニーやセックスのとき視覚的興奮ができない）、本、映画、テレビ、パソコン、食べること、日常生活、アート、ファッション、景色、美しいものなどをみることができないというのは、つらい、と実感した。恐怖感があった。それは、あーあという感じや、いつも何か引っかかっている感じでもあった。病気が完全に治るといのがないので、どんよりと心の奥に錘おもりがある感じだった。

僕はいままで、自分のことは棚に上げて、「障害、能力差（頭悪い、スポーツダメ）、容姿での劣等感（ブス、チビ、太っている）」などのコンプレックスを吹き飛ばそうとやってきた。障害者の運動にも学生の頃から少し触れ、優生思想を批判し⁶⁾、出生

6) 優生思想の定義としては、立岩真也さんの「(1) 人の性能をよくしようと、悪くするのを防御しようと、(2) そのために人間の遺伝的側面に働きかけようとする思想」(立岩 [1997] p 411)、森岡正博さんの「生まれてきてほしい人間の生命と、そうでないものとを区別し、生まれてきてほしくない人間の生命は人工的に生まれなないようにしてもかまわないとする考えかた」(森岡 [2001] p 286) などがある。これを核部分として、拡張された優生思想の概念というものがある。生産活動などで社会に役立たないものを低く評価する思想、能力主義思想と同じような意味で使われる。

前診断に批判的だったし、自分の子どもが障害者でもいいとおもってきた。それはそれなりにホンネだった。その子と生きていく覚悟を親はもつべきだと考え、自分がもしそうなってもその「運命」を受け入れられると思っていた。

しかし自分の障害を具体的に生活の不便・不自由と実感して、自分が障害をもつとなると、それまでの考えをもちつつも同時に矛盾しつつも、自分の別の側面のホンネが見えてきた。また自分の子どもが人生の途中から障害者になると考えるにつらいと発見した。親や恋人や親しい友がそうなるにつらいと感じた。生まれつきと途中障害の場合への感覚の差異を見つめることで、自分のホンネが見えた。そこにあるのは、やはりそのつらさの実感。簡単じゃない。自分はなりたくない。しんどい、というホンネを見つめざるをえなかった。

エンパワメント、自己肯定などむつかしい。自己肯定など簡単にできやしない。障害があるのはつらく、いやだ。「あるがままを認める」というのは簡単ではない。そう実感することができた。月並みな言い方でこぼれるものも多いが、やはりスッキリ言うなら、今までは他人事で考えていた。

また入院中に考えたのは、上述したように〈スピ・シン主義〉では欲望の肯定をいうが、その欲望は今の社会の秩序を前提にしたものであることも多いので、「ブス・ノロマ」とか「障害」をバカにしたり嫌がる面がある、ということはどう考えるかという矛盾にぶつかった。「欲望の否定じゃない。禁欲主義じゃない」という感じもあるが、いくらうまく説明のバランスを探しても、ホンネでは優生思想を多くの人はもっているわけで、「自己の拡張」のなかでより高みに立つことで止揚したいとは思っただけで、自分の障害への怖れをみると、簡単じゃないなという出発点に戻ってしまう。

すっきりがいい、ややこしいことを抱え込みたくない、整理されているのがいい、自分の人生をコントロールすることがいい、人に迷惑をかけるのはよくない、という合理主義万能論の考えも、優生思想的である。そうした考えは、僕の中にもあり、いまの社会全体の問題といえる。優生思想を批判したい気持ちもあるが、僕の中に「内なる優生思想」があるという問題は、自分の問題としては突き詰めきらずに、むしろそういう主体追求の運動スタイルへの批判という形で逃げていた。人間個人の弱さを徹底して追求しても得るものは少なく、むしろそうした個人を作っている社会制度・体制改革こそがあるのだという方向に流し込んだ。それは半面の真理ではあるが、半分は間違いだった。そうした僕の思想的変遷が、本稿のベースにある。

つまり、障害者問題や優生思想を、身近な自分の怖れを通じて考えざるを得ないところに至った。「とり乱し」だ。

「弱き人」への気づきは、アート

しかし、障害ある人として「弱き人」になるプラス面があるという気づきにも至った。(拙稿 [1999] の議論：これを〔Y〕とする。) ホンネで、「それは恵みでもある」と思った。上述したような優等生的な僕が、優生思想の論理でないものに、ホンネで〈ぎりぎり〉のところで出会うという感じがあった。自分の障害とか運命の面を引き受けるしかないという感覚に至る瞬間が何度かあった。そうなったらなったで、そこから始まれば、そこから新たなものに出会うという直感があった。

現に障害をもって生きている人がたくさんいる。しんどくても一方でしぶとく生きられるという直感。昔、ガンと告知されたときも、平気だった。平気であろうとしていた面もあるが、死ぬなら死ぬでいいや、闘病生活ならそれでもいいやという感覚もあった。今までのことはうっちゃって、スッキリ、それなりに残りの時間を集中して生きていこう。それはある種、道を与えられるという安心のような感じでもあったように思う。今でも、もしガンになっても、残りをちゃんと生きたいと前向きに思える。後、何回夏を迎えるのかとか、この人と何回会うのかと考えると人生は短すぎるが、時には人生は長すぎるようにも感じる。「弱き人」になって、安心して、満たされて生きたいとも思う。

〔X〕と〔Y〕のバランスは、どこにあるかと考えた。それは、自分のつらい気持ち、悲しい気持ちをもつということではないか。まず矛盾を認め、二面性を認め、悩むこと。その上で、〈スピ・シン主義〉は、「オメラスから歩み出ること」(拙稿 [1999]) だというバランスだと思った。つまり完璧にすっきりしていなくても、少しは無理があってもいいから、人権論としてエンパワメントを目指し、社会レベルでシステム改革を目指すのを選び取るという価値観の選択というか、勇気のようなものの快楽の追求が〈スピ・シン主義〉なんじゃないか。障害をもつしんどさも確かにあるが、障害に出会う「いい面」〔Y〕をみってみる、その面は確かにあるじゃないかという気づき。その「いい面」を拡大する想像力。じっとしているだけでは自分是不幸となる。「ありのまま」というのは、「アートなし、努力なし」のそのままということで

はない。

つまり、〔X〕〔Y〕の矛盾を「アート」で突破するというような発想が〈スピ・シン主義〉だと感じた。「ろくでなし」,「勉強できない奴」がアートするように、世間の基準も人目も関係なく、自分で楽しむという道。僕の周りでも、無名だけれど、仕事をしながらも絵を描きつづけたり、北海道で猟師になって自分で薪をくべてストーブや風呂を使う生活をしつつ芝居を書いたり料理をしたりしている人がいる。アートの実践だ。

「いまの秩序の上での能力主義的努力」（いまの秩序を上げる、禁欲主義的努力）とイコールではないところの、「想像力、頑張り」を、アート、つまり〈スピ・シン主義〉の実践は必要としているのだと思う。だってチャレンジこそおもしろい。自分に隠れている価値を、いまの支配的価値秩序から離れて見つけ出すような、オリジナルな、脱・秩序、反体制的な、そういう意味での、「ありのままの自己肯定」にいたるのが、目指したいもの。

身体性あること、創造性、面白いという楽しさ、作る楽しさの追求ということと、〔Y〕への至りということが繋がっている。エリートでないアート、ええカッコでないアート、NPO的な社会運動としてのアート、生き方としてのアートがいるし、それは、日常生活を創造的に生きる、違った発想をもって支配的価値から離脱する実践ということで、これならできると思い至った。

視覚障害なら、さわるアートを作ればいい。見えないからこそ気づくことを書けばいい。見えなくなったというつらさや気づきを主張すればいい。視覚障害者にとって便利で安全な商品を作ればいい。つまり見つけ出せばいいのだ。どの状況にあらうと、見つけ出せるという気づきは、アートへの開眼だと思った。自分で楽しむこと（創造的）をどんなときにもつくること。破壊的なエネルギーも一つの表現。僕なら、「書く」ということはいつでもしたい。無理にでもそういう道（自分が元気になる道）を見つかるしかないのが、人生なのだ。

そういうことが整理できて、人に病気のことを聞かれて「たいしたことないよ」と明るくいうのでなく、弱みや矛盾や混乱を見せたいと今では思う。今まで、「僕（他人）のことに人は（あまり）興味ない、愚痴をいっても相手がいやな気になるだけ、相手が興味ないことを自分勝手に押し付けたくない」と遠慮してきた面があった。ま

た、たいへんなことでも「たいしたことないよ」というのが男の我慢（抑制）の美学のようなええかっこしいの感覚をいつのまにか身に染み付かせていた。

でも、僕がせっかく出会った病気だから、そこからの“発見”を語るのは、とてもおもしろいんじゃないか。まあ、相手との関係もあるしタイミングもあるし、程度の問題だけど。語るにふさわしく煮詰めることができるかってことだろう。ええかっこじゃなく、目が見えなくなったらどうしよう、読めなくなったらどうしようという不安を深く語ればいいし、障害があるというリアル、どれほどたいへんかを少し実感したことを語ればいい。その「深さ」「発見」がアートだ。

障害者運動への関わりから得たこと

学生のときに障害者解放研究会に入って、それ以来、障害者のAさん（脳性まひ）の泊まり介護に月1回入りつづけてきた。20年を越えた。「健全者は障害者（の解放運動）に関わるべき」という should・義務感の側面があり、しんどいときもあった。無理している面もあった。離れたい、解放されたいという思いが頭をよぎることもあったが、Aさんとの人間関係があって離れがたかったし、いつも人手不足で、離れていく人もいる中で、離れるのは運動を頑張っている人たちから「逃げる」ようで、悪い気がした。だから運動から少し距離をとってきて、最低限のかかわりに限定してきたし、障害者運動の展望を僕自身がなくしていた面もあった。だが、運動は地道にしかし着実に発展してきたし、僕自身はその運動の意義を再確認してきた20数年であった。

しかも、介護が続いた理由の中には、消極的要因だけでなく、得るものがあったこと、楽しいことがあったこと、Aさんとの関係の大事さ、介護しているということへの自己満足、運動とそこに関わりつづけている素晴らしい人たちへの尊敬の気持ちなどの、ある種「積極的要因」もあった。障害者運動の意義というものをどうみても認めざるを得なかった。それは義務感の面もあったが、ホンネの部分（本当に称賛する気持ち）もあった。すっきりしていたわけではない。引き裂かれていた。だが介護から学んだことは、本当に多い。僕がカラダで感じてきた経験として、貴重な実践だった。それは事実である。障害者運動のもつ意義は、当初、僕が予想していた以上の大きな可能性の湖だった。遠回りして、僕は再び、合流しつつあると感じる。そこに関わりつづけている人たちから学ぶものがある。自分のなかに「とり乱し」が生じやす

い。だからこれからも介護を続けたい。決してラクではないが、続けたい。

性関係、セクシャリティ、恋愛的感情、関係性を見つめること

性関係、セクシャリティを見つめることは、自分の矛盾、〈ぎりぎり〉、「とり乱し」を考える上で確かに大きい。

森岡さんは、「本当に真に満たされるセックスとは？」という問いに囚われすぎていたんじゃないかと自分を見つめ、そういうことは実はなかったのだ、局所的な快感でしかなかったんだと否定的に総括していた（森岡 [2001]）。森岡さんはそうなんだろう。

でも僕には、そういうものがあっていいと思う。「心の奥からわきあがる喜び」「心が満たされるような充足感」があった。そこはもっと追求したいとおもっている。〈たましい〉が関連しているとおもう。

また森岡さんの言う「支配的感覚」という欲望は、僕には少ないと思う。自覚がない。支配したいと思わない。試されたり試したり、支配するのもしられるのも嫌い。あんまり攻撃的なのは嫌い。ゆっくり味わうのがいい。

しかし、闇もある。「ただセックスしたい」という単純性欲や「犯罪的妄想」もある。もてたいからええカッコしている、男らしく振舞っているという面がある。「支配的感覚」が本当にはないのかとこころの奥底をみると、明確な支配欲望ではないが、僕のことをNO1・オンリーワンにみてほしい、という欲望ももっている面があり、それは、間接的な支配を望んでいることになるんじゃないだろうか。自分のタイプの女性だと、セックスの可能性を感じて、話しているだけでも嬉しいということもある。「美人がいい、スタイルいいのがいい、胸の大きい方がいい」などという単純さの面もある。（その逆の、年配、美人じゃないなどだと性的・恋愛的興味が低くなる。）まさに俗。そのナサケナイ面を素直に認めるしかない。

でも、そこにも「好みの感じ」があるので、単純じゃない。相性はある。相手の反応の仕方、表情、話の内容、書いたものなども重要。興奮する「物語」はあって、それ自体は人に自慢できるようなものでも、根拠のあるものでもなく、小さい頃からの何らかの幻想の総体に過ぎないものだ。なぜAさんには興奮して、Bさんには興奮しないのか、Cさんに惹かれるのかは、よくわからないし、何ら普遍的なものでもない。長いすらっとした足がすきとか、細いからだが好きだといえば、今のモデル的な美の

秩序を再生産していると批評することもできるが、だからどうなのか。じゃあ、相手を感じて気持ちいい様子とか、悲しいような感じも好き、というのはどうなのか。だがそれらは、とにかく、「たいした物語ではない」ことだけは確かだ。

またもちろん、若くて美人だからいいなんてもんじゃない、というのもある。ちょっと話してがっかりなんてのもある。若くて幼すぎて、深みがなくて、興味もてないということがある。センスというか、においというような気配・感覚が大事。自分のタイプの女性でないと、性的にそそられない。ある種、醒めた対応になる。異性愛者である僕は、男性に対しては性的な面では誰に対してもそういう面がある。同じ人なら飽きる傾向はあるが、人は変化するから一概にいけない。自分では自覚できていないようなことや書けない闇や複雑性がある。NO1・オンリーワンと強くは思っていないくて、嫉妬心は少ないし、ほんとにその人が幸せであるといいなと思う気持ちがある。僕はもう嫉妬で怒ったり競争したりは（ほとんど）しない人になった。静かに諦める人になったのだと思う。恋愛の実際として、美人という要素だけなどではないし、僕にとってのセクシーといってもいろいろな面の総合だ。魅力的と思う相手の幅も広がったという感じがある。そういういろいろな幅はある。

つまり、性的・恋愛的エネルギーのなかにも、人間存在と同じく、理性の面と感情の面、俗の面と〈スピリチュアリティ〉の面がある。実は『シングル単位の恋愛・家族論』で書いた恋愛論は、そこを6要素として浮かび上がらせようとしたものだった（ただし〈スピリチュアリティ〉と「支配欲」に関しては除外した）。

しかも、当然、性的欲望とか恋愛的欲望だけが原動力ではない。男性でも女性でも、年齢・性別にかかわらずなく、センスがあうとか、尊敬できるとか、すごいとか、おもしろいとか、変わってるとか、魅力的な人は魅力的ともおもっている。話していて楽しい。〈たましい〉をこめて話をするのは楽しい。恋愛欲とか性欲でない、そんな関係の快樂を僕は何度か経験して、それがあうということを自信をもって言えるようになった。年齢が離れていても、同性でも、相手が学生でも、話してよかったなと思うことがあるのだ。幸せになれたのだ。そんなところに至ったから、相手を異性愛とか家族愛という狭い枠だけで〈所有する〉ような家族単位の言動を超えたシングル単位の感覺を、僕はホンネで「もっている」といえるのだ。

恋愛とセックスにおけるカップル単位を越えて

恋愛に関して、〈ぎりぎり〉を考えてみたい。原則は僕がこれまで書いてきた「シングル単位論」でいいとおもっている（拙著『シングル単位の恋愛・家族論』）。それをもう少し、セックスと絡めて展開してみたい。そしてその上で、「浮気とか、自由恋愛とか、2人を好きになるという名で呼ばれる問題」について、実際の悩み、矛盾した2面の格闘を考えたい。

複数の人を好きになるという事はありうる事である。今までは、タブー視のなかで、自分の感覚の拡大を抑えていただけだ。「君だけが好きだ、君がNO1だ」という「二者排他性」の枠内でのみ考えるから、「誰が一番か、そうでないか」ばかりを考えてきたのだ。

そもそも誰かと誰かが「愛する、恋愛する、結婚する」というとき、それが二者に閉じているとはどういうことなのだろうか。つまり、「パートナー以外の他人を好きになったりその人とセックスしてはいけない」というような「私たちは一体・運命共同体、特別の対関係（恋人、夫婦）という単位的考え」は何を無意識のうちに前提とし何をもたらすのだろうか。

僕は、これを「一番好きな人」＝「NO1」と「それ以外」に対する意識の差として考える。男ジェンダーは、NO1だけを大切にし、その人を自分の一部として所有・保護するのが「愛」と考える。つまりNO1だけを愛する愛情とは、「自分および自分の所有物」を愛しているにすぎない。女ジェンダーにおける家族単位視とは、その裏返しで、男に「NO1の位置で選ばれた女」（妻、恋人、パートナーという地位）になろうとすることだ。「誰かに属している女」にだけ「愛」という「しあわせ」があり、自分の存在証明であり、社会からもそれが正しい生き方と承認されるという意識だ。

したがってセックスは、愛の証としての、そのNO1どうしの間でのセックスのみが「正しい性、きれいな性、美しい性」となる。「貞操」は守られるべきものになる。女性ジェンダーにとっては、選ばれ、捨てられないために、および選んでくれたことへの感謝のしるしとして、男に捧げるものとしての客体的セックス、取引材料としてのセックスとなり、男性ジェンダーにとっては女性所有・保護の代償・褒美として「もらう」もの、あるいは「勝ちとった戦利品」してのセックスとなる。

NO1以外（婚姻外）に対してはどうかということ、このカップル単位意識の下では、男ジェンダーとしては、「NO1以外」とは自分（所有物）でないものであり、NO1ほど大事にしなくていいということになる。すなわちそうした「自分」でない＝「他者」＝「単位外」との交流には、愛も尊敬も敬意も、NO1ほどには必要ないことになる。「NO1」と「NO1以外の人」に差をつけることが必然となる。

そこでの性は、「裏切りのセックス、正しくないセックス、レベルの低いセックス、ただの遊び・快樂としてのセックス、動物的でだめなもの」とみなされる。そこには心の交流はないとされる。これの極端な最終形態が、売買の性、商品化された性、カネでかう性とされる。NO1でない人との性は、愛や尊敬を売り渡した卑劣な行為と決めつけられ、「NO1とだけセックスすべきと考える正しい人たちは」、「正しくない人たちは」を見下す権利を得ることになる。セックスワークへの蔑視とは、こうしたカップルを単位と捉え、NO1を特別視することの必然的帰結であり、結婚制度の正当性を保持するための別表現だった。

このことは、女ジェンダーからみれば、NO1に選ばれなかった「女＝私」はダメであり、幸せではないという自己否定感となる。NO1に選ばれなかったことは、関係が特別でもホンモノでもなかった、その瞬間の感情や快樂はウソだった、意味なかったということであり、「選ばれなかった」のにセックスしたことは、使い捨てにされ、遊ばれたことであり、貞操を守れなかったダメな女になったこととなる。そのセックスは、「存在証明の愛がない性、汚い性、墮落した性、猥褻で、はしたない性、愚かな性」であり、忌むべき「売春婦と同じ」になってしまった「恥の性」となる。

つまり、二者排他的な愛と性の一体視は、「愛」＝特別な位置（NO1席）の獲得競争を通じて、「社会からの承認、庇護」を得る女になるか、得られない女になるかという、女のなかのヒエラルキー秩序を構築するものだったのだ。結婚しなかった人、できなかった人、していない人、独身者（未婚・非婚）、恋人のいない人、愛人、子なし、セックスワーカーなどを蔑視し、そうした「低級な女」というレッテルを自分に張られないために、皆が結婚へ執着し、「結婚＝幸せ」という構図を支える。

これは、性において、選択し自己決定し、自分の快樂を享受する性的主体となることとは、正反対のことである。「家族（NO1）のため」という名による家族内だけの幸せ追求や、セックスの道徳化と取引材料化をもたらすカップル単位視を、根底から見直すとはどういうことなのか。自分を深く見つめることが問われている。この人

はNO1, この人はNO2という順序をつけること自体をなくしていくしかない。愛も尊敬も敬意も, NO1以外の人にもつような, そういう豊かな関係を作り上げる実践をするしかない。

先に、「NO1」という表現を使ったが、僕の主張の眼目は、まず「NO1」があつてそれが固定されることを前提としているのではもちろんない。念のため。「運命の人と出会い、その人だけを愛し愛されることを理想とする恋愛論」が溢れる世の中で、それを批判するための便宜であつて、根本的に「NO1」という序列化自体を批判したいと思う。僕らは多面的な存在で、関係は複雑で、いろいろな側面と程度で人は付き合っているから、誰かをNO1と決めつけることなどできないのだ。そうはいってももちろん現実には難しいが、友人の水島希さんがまとめているように、恋愛（結婚・家族）という枠自体に疑問を持ち、関係維持（形）に重点を置くのではなく、関係の質・中身自体を問題とし、恋愛（結婚・家族）以外の人間関係を充実させ、恋愛（結婚・家族）以外に重要な活動目標をもって生きていこうっていう実践は可能である。

NO1を作るという「対^{ついで}=共同体の発想」と異なる意味では、僕は「特別な関係」はアリと思っている。AさんとBさんとが、僕とある人とが、相手の「測りがたさ」を認めつつ、相互の〈たましい〉が交流して、他の誰とでもない、その人との特別な関係を作ったという「結果」はあると思う。結果であつて、契約などの形ではない。だからその特別な関係は、複数の人と、それぞれ独自のものとして作ることが可能である。対という形でなく、瞬間の質、その積み重ねが「特別な、スピリチュアルな関係」を作る。NO1という発想とは正反対な、そういうスピリチュアルな関係をもてた、そういう関係があることを知れたという喜びを、若い人に伝えていく「教育」がジェンダー教育だと思う。

複数の人を好きになることや浮気、嫉妬について

以上の基本的考えをふまえてもなお残る問題がある。現実のからだはひとつで、1日は24時間しかなく、僕らの多くは完全に嫉妬のないような人間にはなれていないという「現実」があり、「その中で現実的にどうするか」という問題だ。

人のやさしさ、「恋人」の「痛み」を考えると、自分の自由の制限をみずから選ぶ

という選択はありうる。つまり、深い関係になるのは一人に絞るとのことだ。一般論で「二者排他的でありたくない」とわかっているとしても、現実一人の人を深く愛し、一緒に暮らして、生活のただらと流れる時間を共有したいという願望が（皆ではなくとも、ある人には）あることは認めざるを得ないし、それを間違っていると断罪するような性質のものではない。そのとき、複数の人と親しくなるのは困難だ。

しかし、恋愛あるいはセクシャルな色気ある生活の楽しさ、ハチャメチャ的なエネルギーの楽しさ、偶然の出会いの豊穡さなどという積極性があることも事実だ。「ラブ・ピース・クラブ」⁷⁾のなかで論じられているように、主体的に「ヤリマン」になるようなことの積極性は、やっぱりある。セックスがあってもいいが、セックスに限定される話でなく、セックスがなくても深い関係というものがあり、その深い関係を禁欲するというのは、どうみても積極的でない。

僕自身、すっきり100%どっちだとなにかを言い切れるような状況ではない。ある親しい人を傷つけないのも、その人との関係を大事にしたいのも事実なら、それ以外の親しい人との関係が大事なのも事実だ。何らかのきっかけで親しくなれた、その素晴らしい人との関係を一人に限定して他は切り捨てるべきとはどうしても思えない。そして僕がステキだと思う人が、僕以外の人と仲良くてももちろんいいとおもっている。むしろ、その人が幸せならよかったねと穏やかな感じでおもう。

よく嫉妬心は本当はないのかと聞かれるが、かなりないほうだとはいえる。しかしそれは、自分がそういう親しい人から受け入れられていると実感できている余裕かもしれない。相手が「離れて」いくとわかったとき、昔のように強い嫉妬心が絶対に出ないとは言い切れない。

だがまた考える。「親しい」とは、そもそもそういう受け入れられている感覚なのではないのか。向こうの関係がどうあれ、自分との関係が充実しているというある種安定した信頼感のようなものが大事だと思う。それがあればいわゆる嫉妬心というもののはあまり出ないと思う。そして相手もそういう感覚をもっていけば、「離れる」というのはそうそうあるものでなく、その意味でやはり嫉妬心には繋がりにくい。もしあったとしてもそれはそれなりの理由があるわけだから受け入れるしかないし、距離

7) ウーマンフレンドリーな、セックスグッズ、エロティックグッズ、ブックなどを企画販売する会社で、HPにはその主張を示すエッセーなどが掲載されている。

(<http://www.ummit.co.jp/love>)

が離れたあとも記憶の中に親しい感覚が残るだろう。

でも人の関係は一定・固定・永続的安定ではないし、離れていくというときに穏やかでない気持ちになるということを全否定するつもりはない。僕自身、親しい人が他の人を好きになって離れていくとか、他の人と楽しくセックスしているというのを、積極的に一緒になって喜ぶ感じではない。好きにやってくれという気持ちもあるし、あまり関心をもたない。結局、知りたくないという感じがある。知ってもいいことがないような気がする。

あるところで、嫉妬について語る人が、「自分の好きな女性に、他の男が口をきいただけで撲りたくなる」とか「高級車にのっている人をみると嫉妬する」と言っていた。そういう感じは僕にはないし、上記のようにもいろいろ考えるので、僕は、嫉妬心はあまりないと言えるが、それでも、やはりすっきり言い切れるものでもないという気づきがあった。ある学生が他の先生をほめると少し嫉妬に似た気持ちを持った経験がある。ある人が、僕でない他の人の本をほめ、僕の書いた本に興味をもってくれないということもあったし、そのとき少しがっかりの気持ちがあった。第一、僕は昔、付き合っていた女性に去られて、むちゃくちゃ、嫉妬し、相手の男性と彼女を憎んだ。そういう実績がある。

そういう中での僕のバランスはどこかというところ、僕自身は親しい人のことを詮索しないし、知りたくないし、同時に相手にも詮索されたくないし、知られたくない。となると、秘密もうそもごまかしもありだと思う。それが僕の思う、相手を尊重しつつ自分の自由も大事にするバランスだ。

こうした「とり乱し」的な揺れとかグレーゾーンを含めて、やはり関係はシングル単位だなど思っている。どんな場合でも当てはまる一言でのマニュアルというより、幅のある、その瞬間の複雑性を総合して、変化の中でいろいろ変わっていくような、それでいて一本の方向はあるようなのが、〈ぎりぎり〉にもとづく〈スピ・シン主義〉的なスタイルだ。

こういう僕だから、「浮気」というような概念は必要ない。「誠実」を基準に「浮気」を責めるという概念も、嫉妬するのが愛情の表れと居直るような考えもない。

性教育

人に性を語ることに、狭く言えば性教育のことを考えても、〈スピ・シン主義〉では、〈弱さ〉や揺れを含めたいと思う。

先生や宗教者や良心的な人々は、聖なる上層部分で、一般問題を語り、自分でも善意のつもりで行動し、「道徳的で正しい社会正義」（安易な希望としての、愛、家族、民主主義、自由、人権、ヒューマニズムなど）を唱えてきたが、しかしその意図に反して、その行為自体が実は、近代主義の枠内にとどまり、個々人のはみ出す可能性あるラジカルな思考を奪い、俗なる下層を排除し、人々に禁欲と努力を奨励し、「結婚し、その中でのみセックスし、家族のために働き、性役割を遵守し、子どもに学校教育を与え、商品消費に奔走する」といったような現在のシステムに人々を従順に適応させ、目に見えにくい形で、内面から支配されるマジメな市民を再生産する構造を支えてきたというようなことがあった。「男女平等」、「男女共同参画」、「男と女の対等なパートナーシップに基づく性教育」等という一般論にはこの手のものが多くある。

とするなら、僕たちは、俗なる方＝「社会的に力を奪われた側」に立ち、下位を持ち上げ、具体的な問題に直面し、道徳を否定し、聖俗関係を逆転させることによって、聖俗分離秩序・二分法をぶっ壊し、逆説的に「聖」に近づく戦略をとる必要がある。さまざまな権力に絶望し、聖なるものに絶望し、自分もしばしば小さな権力者になっていることに気づき、そこから「安易ではない希望」を立ち上げようということだ。マジメな従来の上での戦いでなく、秩序上位者に分からないような闘い方として、俗なるものを美しいとするような芸術的かつ、徹底して疑い、拒否し、考えるスタイルの闘い方が考えられる。現代の「人権」論は、そうした「従来思考の枠組み」自体を乗り越える、日常における非権力的な関係を模索する、拒絶する実践として出現する。そういうことを〈スピ・シン主義〉では繰り返し述べてきた。

二分法秩序を維持補完する単純なドロップアウトではなく、日常の微細な権力関係のなかに、それと対抗的なものを作り出し入れ込むという実践的な闘い。一般論的な抽象的な学術的な形而上学的なものでなく、まさに日常の俗っぽい具体的関係の中に、〈スピリチュアリティ〉を立ち上げることが希望だと。

そうした観点で考えるならば、性（教育）についても、「俗」のほうからいきいきと性を語り実践することが必要だろうということになる。つい最近も、今の性教育で、

大人が本音で積極的に語れていないことに子どもたちが不満を持っているという調査をみた。性教育の内容をどうするかもちろん大事だが、性について語るその姿勢や先生の日ごろの何気ない行為が、実は「言葉になりにくい、あるいは言葉と裏腹の何か」を伝えているのだということをちゃんと理解することがとても重要だ。

自分の本音を語らず、一般論や建前や知識だけをいってたり、恥ずかしがったり、いやらしく思っていたり、おどおどしてたり、自信がなかったりすることで、性について、その意図はどうあれ事実上、道徳主義的、純潔教育的なメッセージを発している。性についての自分の抑圧されたエネルギーを、隠したままあるいは自分でも意識しないまま、「正論」の姿を通して他人に転移する、その結果、一般論として性を語るというようなことが一番ダメだ。

そうではなく、性の危険性ややばさや汚さやドロドロさも含めて本音で語れているか、それでも全体として楽しそうに語れているか、気持ちいいものとして肯定し若者がセックスすることも肯定できているか、相手のことを思い、心をこめて本当に伝えたいと思うことを真剣に語れているか、オープンな姿勢か、相手を非難するような気持ちを隠していないか、教師や大人という権力性を意識してそれをできるだけ壊そうとしているか、などが大事だ。そうした〈たましい〉を込めた姿勢こそが、性やジェンダーについての新しい考え方の真髄を伝えるのだろう。口先の死んだ言葉ではウソが見抜かれる。「完成された模範的答え」を与えるのではなく、教師や大人の日常、そこでの教師自身の自己変革（悩み、葛藤）のプロセスを開示することこそ、新しい世界観の教育になるだろう。

とはいっても、「私にはそんなのは無理だ」と思う大人も多いと思う。セックスや性について自信いっぱいの人はい多くない。僕だってそうだ。だから難しい。完璧じゃない。じゃあ、その、自信のなさから「とり乱し」つつ誠実に語るしかない、と僕は思う。正直に、性についての迷い、しんどさ、コンプレックス、失敗を語ればいい。自分の体の「欠点」。きれいな肉体じゃないという思い。男っぽく、力強く、胸板厚く、運動神経もいいというのではない。女っぽく、細くて、華奢で、胸が大きくて、スタイルが良くて、美人というのではない。だから欲情されない、もてないだろうという劣等感と悲しみ。そうした「理想的ボディ」のほうに実は近づきたいし、そのように言われたら嬉しいというホンネの思い。性行為でも、男ならリードしないといけ

ないとか、女性を満足させなくてはいけないとか、勃起は長くないといけないとかという思い。女性なら感じているふりをしなくっちゃという思い。

でも、自分の「だめ」さを語ればどうだろうか。セックスで挿入してすぐに射精してしまったという失敗。勃起しなかったという恥ずかしさ。性器が小さいとか形がおかしいという心配。感度が十分でないという劣等感。避妊の失敗。セックスのとき、テクニックがないからなのか、自分の体がセクシーでないからか、相手が気持ちよさそうじゃなくて、自信をなくした話。こっちがセックスしたいのに断られてつらかった話。口先では格好いいこと言っても、実は「セックスしたい」という思いが充満していたときの話。道行く人や友人やタレントなどにひそかに欲情していること。もてなくて、気持ち悪がられて、セックスできなくて、孤独でとても苦しかった話。

思い起こして、10代のころの、まだ性経験がないころの妄想の思いや、やってみて「なーんだ、こんなもんか」とおもったことや、オナニーについてのあれこれの情けない話はどうか。若いころの自分がいかに性について無知だったか、世間の間違った知識に惑わせられ、ヘンなところで悩んでいたかを語るのはどうか。ダメな奴とわかっていても好きになったり、その場の雰囲気流されてしまったり、だまされたりしてしまう、自分の弱さ。30、50、70歳になった今でも、性について悩んでいることがあるということ語るのはどうか。

情けなさの上でのうれしい話でもいい。昔は自信がなかったが、セックスした相手にほめられて自信がついたという嬉しい話。人の好みはそれぞれで、美男美女でなくても、いいスタイルでなくても、楽しくセックスできるという話。しょせんみんな、ちょぼちょぼで、性的にもそんなに完璧に満たされているわけじゃないという話。セックスしたくてもできないこともあるし、もてない人も多いし、セックスがなくてもいい時もあるし、セックスなくてもいい人もいるし、オナニーでいいこともあるし、要するに多様であるということ。性を広く捉えて、狭義の性器挿入や恋愛感情に囚われず、広く人との交流を楽しむことに思い至ること。

つまり、「答え」でなく、多様性を示し、選択肢を示し、自由を示し、失敗や苦しいことや分からないことや分かっているのにやめられないこともあることを示し、そういうことをひっくるめて性を肯定的に語るということが求められている気がする。自分の情けなさや失敗など、そういう「弱さ」を示すことこそが、実は、上下優劣を決める秩序を解体し、権威・権力を否定していくというスピリチュアルな実践だと思

う。そしてその上で、簡単じゃないけど、〈ぎりぎり〉のバランスで、ともに「求めるもの」として、双方が繊細な感受性をもち、相手に敬意と感謝を感じるような関係を目指していくことが、〈スピ・シン主義〉なんだな。

喪失体験

僕は物忘れがはげしい。あまりいろんなことを覚えていない。でもあの時のことは覚えている（ような気がする）。

手紙が部屋に入れてあった。ノートをちぎった紙2枚だった。

「あなたと別れたい。もう好きではない。あなたは『教師』だった。それがいやだった。他に好きな人がいる…」みたいな。

いきなりか！！ 一挙に、最期通牒か。今まではナンだったんだ。「再考の余地」「猶予」「敗者復活」ちゅーもんはないのか。うわおー、くそ！ くそっ！ くそっ！ なんじゃーこりゃーアアアアアアアアアア！！

そしてその手紙をくちゃくちゃにして叩きつけた。まるで安物のテレビドラマのように。四畳半の部屋の中を傷を負った熊のように歩き回った。テレビを置いていたスチール製のタナを蹴り上げた。そこがポコッとへっこんだ。じっとしていられなかった。SHIT! SHIT! クソッ! SHIT! 世界がグラッと揺れた。心が、気持ちが1000%落ち着かない。落ち着けないどころか、沸騰してそこかしこに零れ落ち、じゅーつと音がした。体が今ここにあること自体を持て余した。走りだして叫んで、何かをモーターズに破壊しなければどうしようもない気持ちだった。何かを「殺す」ほどのエネルギーだった。

すぐに駅まで走って、電車で飛び乗った。彼女の職場にむかうのだ。とりあえず。そう、何も展望はない。電車でもじっとしてられない。電車の中で走れないもどかしさをこのとき強烈に知った。負の、負の、負のエネルギーだけ。世界がかすむ。電車が遅い。一駅ごとに止まっている。周りの客が幸せそうにのんびりいることが、殺してやりたいほど嫌な感じだった。不安。何もかも、人生最大の不安。ただ、今すぐ俺の体を彼女の職場へ運んでくれ！

そこから俺の第2の人生は始まったのだろうと今にして思う。

「ひとつ」と思っていた二人。優しく、繊細で、セクシーで、賢くて、素晴らしい彼女。僕の人生の誇り。ちゃんと生きてることの褒美。優しく、理解があって、楽しくて、社会の不正にも怒るような正義感があって、賢い彼氏だから、お似合いのカップルで、ずっと仲良くやっていけるだろう……。疑いはそこにはなかった。

そして、突然の別れ宣言。結果のみ。逆転なし。自分の体から腕が引きちぎられた痛み。部屋がゆがんで見えた。毎日何をする気もなく、所在無い、ここにはないとこのことかと。それが中心にまわっていて、苦しくて、胸の奥から虫が体中を這いまわっているから、じっと落ち着けない感じ。死のうとは思わなかったが、「死ぬか」という問いは自分に向けられた。修論書きとか阪神優勝とかでごまかしていたが、彼女と似た人をチラッとみただけでドキッとして動機がして、頭がパニくるような状況だった。多分当時の僕はおかしかったのだ。

それは、自分の中の、権威や確かなものや男性性や自信や調和が、崩壊していく過程のはじまりだった。「闇」に少しだけ触れ、他の人が語っていたかすかな「きしむ音」が、はじめて、はっきりと聞こえた。それを手がかりに、それを大切にして、20年近く進んできて、今〈スピ・シン主義〉というバランスに至った。

胸の痛みというか、落ち着かない所在無さはずっと残った。その間、何度か彼女に会い、不思議な関係が薄く薄く続いた。僕はずーと大好きなままだったのだ。少なくとも6～7年くらいは強くそうだったろう。いつすっきりと脱皮できたのかは思い返してもわからない。10年後にも痛みは残っていた。徐々に薄くなっていったとしか言いようがない。ただあの時、「底」が見えた気はした。あれを「底」として僕は生きてきたのだ。あれ以来、少しは「弱く」なることで強くなったと思う。

僕にとって、あのときに勝る喪失体験は今だ、ない。思い出すと、ブルーハーツの『TOO MUCH PAIN』が頭の中で鳴り響く感じだ。

環境問題における気づき

今でこそ、僕は、環境問題を考えるのは当然と思っているが、昔は「人間社会の差別や格差を放置して、自然保護などといってるのは甘い」「自然回帰などノスタルジ

ックな感傷的発想だ」というように考えている面もあって、環境問題よりも人権侵害や平和、労働問題などのほうが緊急かつ重大だと優先順位をつけて軽視していた。あるいは、環境問題を解決するためにも大きな構造改革、政治改革だというような発想だった。

それを象徴するのが、15年程前、自分の古くなったバイクを山奥に捨てた事件だ。こんな山奥の山の斜面だから、誰もこないし、関係ない、誰にも迷惑をかけないという安易な考えだったようにおもう。一般的には環境問題を考えてるつもりで、ほとんど考えてなかった。今から考えるとなんて愚かだったんだろう。人間は変わるのだ。

そうした意識は、街中で「小さなゴミをすてる」というようなことに対する軽視の感覚にも表れていた。学生の頃は、「ゴミを捨てるのはいけない」とか、「言葉遣い・挨拶をちゃんとする」とか「服装などの礼儀作法を守る」などといった「古い昔からの道徳的・慣習的なこと」に反発する気持ちが強かった。そんな“小さな、些細な”ことより、もっと“大きな、大事な”構造的階級的な問題に向かうべきと思っていた。小さなことを言うのは、古い人間の表れと感じていた。過激に根本からの大きな改革を叫ぶ方がいいことと思っていた。

今でも、改革を妨げるような、保守的で、現状維持的なことは嫌だし、そのラジカルな感覚に積極性がある場合もあることは認めるべきと思う。だが、これまでを振り返れば、この環境問題への態度に表れているように、僕のなかには、一面的な決めつけがあり、傲慢さがあったことは確かだ。そして、今でもその要素は残っている。

そんな僕だったことを思えば、常に自分の感覚を疑ったりチェックする必要があるし、昔から自分は一貫して正義の側だったような顔をしてはならないと思う。そういう自分の、案外いい加減なところ、〈ぎりぎり〉のあやふやな境界領域をみ続けることが、これから大事だと思う。

瞬間の豊穡さ

以前の僕は、理論的に考え、善悪を判断し、それに沿って社会改革を考えるというように、とても計画的で固定的な視点を中心にしてきた。その対極の、その時々、非合理にも思える「感情」などというものは、迷信と同じく、意味のないもの、時には社会の前進にとって反動的なものともみなして軽視していた。自分でも自分の感情を重視していなかった。実は感情や直感に大きく規定されているのに、そのことに無自

覚だった。ある面では、自由になりたいって好きなこともしてたくせに、それとまじめなお勉強の面とが分裂していた。

だが、成熟して人間や世界についての総合的把握に近づくにつれ、そうした固定的な見方はとても静態的で現実の豊かさを見落としているものと思うようになっていった。その結果、発見した視点は、瞬間の大切さ・即興性の意義ということだ。

例えば、サッカーは、結果としての勝敗が問題なのでなく、その一瞬一瞬のプレーの質、何が生まれるかわからない、どうなるかわからない、それを切り開く創造性ある動き、あるいは偶然性、そうしたことの快樂、緊張がいいのだ。ゴールが決まるかもという極度の緊張、1点差で負けていて、残り時間がないというあせり、などが美しい。その瞬間の意識が積分された上でのゴールが決まったときのエネルギーの爆発、そうしたものの総合が、スポーツ観戦・参加の面白さだ。時間が凝縮するということは、ここにある。

人生も同じ。そういう充実した密度で生きたい。今の一瞬をスローモーションのように深く細かく味わい尽くす感性をもつ。「今」の快樂への自己の投入。だから、面白いアートに触れる・創造する、ハイキングしながら風や景色やニオイを味わう、旅をして異空間を感じる、転職し生活スタイルを変え創造していく、自己の表情や話し方などを作り変えていく、目の前の人と深いところで認め合えるようなスピリチュアルな時間をもつ、といった、そういうからだで感じる刺激・快感を求めるのはおもしろい。快樂を得るためには、「動く」こととその瞬間を微分すること（時間的に細かく細かく、質的に繊細に味わい尽くすこと）が必要なのだ。

そういうことがわかってきたのだが、この何気ない日常が、いつも濃密な時間で満たされるわけではない。僕のかかわりの質によって、凡庸な、あるいは無駄な時間にもなれば、素晴らしい時間にもなる。そして、現実には、深まらない“薄い”時間がよく流れる。僕の凡庸さを反映しているのだ。即興的にスピリチュアルに関わるなんてことが、ほとんどできていないのだとわかる。

泣くために、出会う

元気だった父が料理の仕方が分からなくなるような初期の痴呆になってしまった、という夢をみた。哀しかった。記憶がなくなることについて考えた。家族の大切さをおもった。父の介護を他人任せでいいか。（僕は一般的には介護の社会化をいってる

が) 夢の中では僕は父を看たいな、そのためには仕事は二の次だなという感覚を持った。誰かを深く愛し、それを失う悲しみを、夢で感じた。昔、彼女が離れていき、ほとんど同時に飼っていた犬が死んで、もう二度と深く「命あるもの」を愛したくないと思ったほどの“痛み”を思い出した。その恐怖感が、頭でなく心の奥のほうでよみがえった。

そして思う。「いま」に感謝したいなど。「いま」を大切にしたいと思った。父や母やおばあちゃんが生きているという神秘。大好きな友人たちが生きているという輝き。僕に微笑む人の顔。一瞬、一瞬に無限があるということがわかった。「目盛りの間」、〈混沌の闇世界〉がみえて、時間の観念が変わった。同じ10分の会話でも集中すると深くなる！ 誰と会っていても、その深さの可能性に気づけば、なんて、今まで、流されて、もったいない生き方をしてきたのだろう、大雑把に大事なものも見過ごしてきたのだろうと思った。流しそうめん、すくった麺の数がとても少なくて、多くを流してしまったという感覚。

その発見は、身近な人と少し深い対話ができたとときの喜びの感覚、いのちという奇蹟への感謝という感覚に繋がる。〈スピリチュアリティ〉への感覚に繋がる。今は、生きているし、いい関係（家族、恋人、友人）があるし、仕事もある。だから、これが続くと思って安心しているが、本当は、いつ、病気になって死ぬかもしれない。いつ、この今の関係が終わるかもしれない。いつ、仕事がなくなるかもしれない。ほんとに一歩先と少し横は崖っおちなんだ。でも、「そんなこと、確率低いし、自分にはないだろう、なったらなったら考えるさ」と思っている。でも、実際、世界には失業も、関係の破綻もあふれている。実際、自分がそれに直面すれば、のんきに言っていたことなど吹っ飛び、泣いて嘆き悲しみ、気も狂わんばかりに苦しむ。その苦しさに無関心な周りの人に対して、憤りが膨らむ。

それが実感できれば、他人事でいられなくなるし、今の奇蹟的に幸せな状況への感謝もでてくる。目の前の人が大切な人と実感できる。この一瞬への感謝、存在自体や出会いや偶然への感謝、そして、この一瞬の幸せの質を大事に味わおうと思えてくる。そして、自分のすべきことも見えてくる。そういう微細な感覚の先にあるものを僕は、「スピリチュアルなもの」と呼ぼうとしている。

人は泣くために出会う。後に繋がる「得」とは呼べないような、そのときだけの関係としても出会う。別れのつらさを味わうために出会う。そうとしかいえない。いろ

んな苦勞というマイナスに出会うために旅をし、それが豊かさに繋がるように、別れが待っている「人」とも積極的に近づこうと思う。そして混乱したり、闇を見たり、矛盾に出会い、悲しもうと思う。「愛するから苦しくなる。それでも愛するのか」という問いは昔からあった。そしてそれには「そう」と答えよう。

出会った人やコトと、深く関わってみればいい。それからどうなるか。わからない。関わってこそわかることも多い。今の狭い生活だけを大事にして、「出て行かない」「動かない」「広げない」のって、消極的。だから僕は、「予定調和の安定さ、何もなさ」から出るために、自分を他者との出会い（未知との遭遇）に追い込みたいと思う。偶然の流れに自分を開きたいと思う。チャレンジへもっていきたいとおもう。

だが、そうは思うが、日常は、慣性の法則でむしろだらだらと昨日と同じように進む（それを求めている）。何か不規則なことが起こると、ジャマくさいなあと感じてしまう。何かやっているようで、大きなところでは一定の枠の中のままだったって感じがする。僕は本当に、「予定調和の安定さ、何もなさ」から出ることができるのだろうか。〈スピ・シン主義〉は、そうした感覚をもちつつ、脱出（OUT!）のチャレンジをして自分を高みに向かわせるというスタイルなのだとおもう。

星やエニアグラムから見えるもの

友人が、世界的大ベストセラーの星の話から、星が教えてくれる僕の姿を教えてくれた。少しあたっているところもあった。

僕は、「強さ」を象徴する星に生まれているそうだ。有名人でいえば、ヒラリー・クリントンと同じ時期に星がある。要求の厳しい人。細部へのこだわりと集中度においてかなう人はいない。厳しい目を持っていて、極端になると、偉そうにお説教をすることもある。公正さや倫理の問題になると、他人の行動を結果よりも意図で判断し、モラルに反してるとなると、一刀両断してしまう。とはいえ、自分にも大変厳しい人で、言動に一貫性がなかったりすると、激しい自責の念にかられる、らしい。

また家族や友人に認められたい、好かれたい、という強い願望があるそうだ。明るい面と暗い面がきっぱりと別れており、明るい面が出れば、太陽のような輝きを発し、その魅力で氷のような心も溶かすが、暗い面が出ると破壊に向かう。

ひたすら粘り、苦い思いをすることもある、らしい。窮地に陥ると、他人への不信任感が顔を出すタイプ。他人にうまくできるわけがないとか、あの人が好きだけど、好

かれてはいないだろうなどと思いこみがち。怒り、ねたみ、拒絶など、他人の悪感情を責めるが、それは実は自分の心の中にあるもので、他人を責めて苦痛を軽くしているだけ。

自分のしていることをわきまえ、言動に責任がもてることを誇りにしている。許せないこと、我慢できないことは、軽視、恩着せがましい態度、いわば屈辱的な態度に出られることなど。批判されることに過敏で、身近な人はなるべく議論を避けようとする。もともと争いよりも、話し合いを好むが、議論のための議論になりがち。じかに攻撃されると、白黒はっきりさせるまで戦うような性格。

偉そうに説教するのは、相手を傷つけたいからではなく、むしろ逆。わずらわすつもりなどないのだが、相手への好意から、なんとか手を貸したくなる。批判が役に立つと信じており、悪い状況は放っておいたら改善されなくなると思っているタイプ。

以上が、星から導いた僕の性格だそうだ。正義とか道徳などを大切にし、自分にも他者にも厳しく、相手に関わろうとし、それが説教とか攻撃にもなる、というようなところか。嫌な奴だなあとも思うが、そういう面はあるな。でも、多かれ少なかれ、こういう面はあるといえるのではないのか。

この星の話をもて、僕は、エニアグラムの9つの性格類型を思い出した⁸⁾。エニアグラムは、自分が囚われている枠に気づき、自分や他人を深く理解し、コミュニケーションを改善したり自己成長をもたらしたりするために、9つの「ソウルタイプ」（1 智恵、2 愛、3 真正、4 美、5 知、6 勇気、7 喜び、8 力、9 平和）から人を見る。人は特定の性格タイプをもって生まれ、それは一生変わらないとされる。

9つの性格タイプを簡単に紹介すると、

- ①改革する人（自分は思慮分別があると思ひ、理想や理念や倫理基準が高く、「墮落し悪意や欠陥をもつこと」を恐れ、怒りや正義感をエネルギーに、理想を現実にするために努力を惜しまず頑張り、リラックスしにくい。その高い基準を基礎の自分にも他人にも厳しい。とらわれがきつくなると完璧主義になる）、
- ②助ける人（無条件に愛されることを求め、人とのつながりを中心的価値にする人）。

8) ここでのエニアグラムの紹介はすべて高岡よしこ、ティム・マククリーン [2001] を用いている。

- 思いやりがあり面倒見がよい「与える人」であるが、とらわれがきつくなると、自分勝手なおせっかいになり、相手に干渉し、恩を売り、所有欲が強くなり、それが評価されないと相手を強く非難する。相手が自分から去らないように強迫的に愛を求める),
- ③達成する人 (自分には魅力・能力があると自信をもち、実利的成功を指向し、目標のためにハードに働き、実際それを達成するタイプ。気持ちの表現とか親密な関係等をもつのが苦手。とらわれが強くなると、競争心やステータス志向となり、自分より下と思うものに横柄になり、実力以上にみせようと無理をする),
- ④個性的な人 (繊細で直感的で、感受性豊かで、人生の深さや美しさを感じ表現することで自分らしさを示すタイプ。自分固有の存在意義を見つけたいという欲求をもち、個人的なことを通じて普遍的なことを深く追求し、価値観の合う理想的な相手を求める。とらわれが強まるにつれ、気分にもラのある自意識の強い人となり、人生に対して斜に構え、自己憐憫、自己放縦、鬱的になる),
- ⑤調べる人 (興味をもったことに対し知識を学び没頭する理性重視の思考型の人。他人に依存せず、すべてを構想し、納得してから行動するタイプ。感情表現や人間関係は得意な方ではない。とらわれが強くなると、知識や技能に依存しすぎ、それがないと行動できなくなる。自分の知性を鼻にかけ、極端なときには孤立し、エキセントリックなニヒリストとなる),
- ⑥忠実な人 (自分のなかの信頼の感覚を大事にして、愛情深く、仲間や組織のために忠実かつ献身的に行動するタイプ。とらわれが強まると、独力では不安になり、安定やサポートをまわりから得ようとして、回りの期待にあわせようとし、優柔不断になる。雑念に悩まされ、不安であるがゆえにルールや原理を頑なに守ろうとしたりする),
- ⑦熱中する人 (なんでも肯定的に考え、冒険や楽しいこと、刺激的なことを求め、自由を好む、活動的で外交的なタイプ。周りを楽しませるのが好きで、人の輪の中心になり、場をもりあげる。腰を落ち着けるのが苦手、とらわれが強くなると、計画が達成できないことやもっといいことがあるのではと悩む。不健全になると、衝動的で無責任になり、快樂主義、躁鬱的になる),
- ⑧挑戦する人 (遠慮せず、腹がすわっており、自分に自信があり、リーダーシップをとり、挑戦心も決断力もあるタイプ。健全なときは、ころろが広く、弱い立場のものを守り、面倒見もいい。とらわれが強くなるにつれて、金や名声や力を誇示し、自慢や強がりを行い、自分の弱さを認めず、他者を支配しようとし、秩序を越えて無理や

りしたいことをしようとする傾向をもつ),

⑨平和を好む人 (穏やかで、人に安心感を与え、平和や安定、快適なこと、一体感を好むタイプ。周りに緊張があると公平な立場で仲裁に入る。とらわれが強くなると、葛藤を避けるために、周りに表面的に合わせたり、改革を恐れて現状維持に固執したり、怒りや不満を表現せずに受動的な形で攻撃する。不健全になると、問題への直面から逃避し、自分を麻痺させ、無感覚や空想やフテ寝、怠惰に逃げ込む。

各性格タイプにおいて、健全な状態がありうるので、どのタイプがいいとか悪いという問題ではない。エニアグラムの考え方⁹⁾の当否は別にして、こうした9つの類型化は、うまくタイプわけしているがゆえに、いろいろ思い当たる面があり、人間を分析するときには使えるだろう。

必ずしも正しいエニアグラム論の用い方でないが、僕なりにこの類型化を眺めると、いかに僕が多面的でありつつも、僕なりの傾向(僕ってこんな奴)があるか、他者と異なるかが、改めて明確になる。

僕はこれまで、①③⑤⑧の面があり、少し④⑦⑨もあった。どれが中心のかというと、学者的⑤というよりも①⑧の社会変革リーダー自信家タイプだろう。だが、〈スピ・シン主義〉にいたる中で考えてきたのは、②や④⑨といった自分に足りない面であり、また各性格タイプにおける「とらわれ、不健全な状態」——例えば、闘争的で自信に溢れた男性原理・能力主義・効率主義の面——の克服であった。そして、僕としては、①⑤⑧のいいところは少し残しつつも、これから④アート面や⑨穏やかさの面を特に伸ばしていきたいと考えているということなのだろう。

だが、そうまとめてしまうと、あまりにも浅く捉えすぎていると感じる。まるで、すべての側面の健全な面をもちましようといってるようなものじゃないか。それは、何もいっていないほど、いい人になろうといっているだけじゃないか。

また、エニアグラムのもともとの考えかたでは、9つ全部の性格をもつなどということはないということなので、あれもこれもというのは無理をいっているのかもしれ

9) エニアグラムは単なる性格タイプ分けの論などではない。ギリシャ語の「9つの点を表す図」を意味するこの理論は、根源的欲求や根源的恐れ、本能とフィーリングと思考、各性格タイプ間の関係、それらの統合と分裂、成長などを総合的に考えるものである。

ない。ただ、僕は、自分はこのタイプとある特定の性格の制限された人格に居直るのはどうかと思うし、他の性格タイプのいいところを取り入れることは可能と思っているので、9つの中で自分としてなりたいものを幅広く追求することはとても大切と思う。

以上から、僕は、星の話やエニアグラムをみて、むしろ自分のダメさの方をみたいと思う。なーんだ、自分って、こういう類型化されたときのダメな側面や足りない側面をいっぱい持ってるじゃないかと自覚することが、今の僕には大事なことのように思える。いい面の裏側にはダメな面（足りない面）が張り付いており、僕はその間を揺れて両面を出しているという気づき。僕が〈スピ・シン主義〉で強調したい点は、そうした繊細な気づきを重視しつつ生きるというバランスの側面なんだ。とくに、殺伐・傲慢な気分が蔓延し、精神水準が低くなっている日本社会で、僕を含めて多くの人が自分のもたらずマイナスや抑圧性を見つめて、それによって見えてくる様々な感覚、特にスピリチュアルな面を大事にしたいなと思っている。それがないような性格論は、気休めや消費や思考停止でしかないように思う。

僕の財産

カウンセラーのロジャースが、仕事で絶頂を極めた後、「中年期の危機」になって、自分の弱さを認められるようになって復活していったのと、現在の僕は似ているところがある。僕自身、自分のいいところを確認すると同時に、ダメだったところに気づいてそれを乗り越える段階に至ったのだ。自分のだめさや弱さを認めればいい。防衛的になるのをやめ、あるがままの自分になればいい。そうおもえてきたとき、そんな僕でも（奥底のいいものを見つけ出して）好きになってくれる人、無条件に愛してくれた人たちがこれまでたくさんいたし、今もいるということに、あたらためて感謝の念を感じる。これは、僕が人を信じ、〈スピリチュアリティ〉に気づける大きな基礎だと思う。僕は深いところで自己肯定感があるという財産を大切にしたいと思う。

今でもまだまだ防衛的なところはあると思う。でも、少しずつ変わってきた。僕は批判されても、今は「そうかもしれない」と思うようにしている。主観ではそうでなくて、反論したいことがいっぱいあっても、「そんなのは意地はっているだけかも」と思うようになった。そういう面があると考えることのほうが積極的だと思う。ここで大切なのは弁解でなく、受け入れること。

それに、個人的問題から目をそらすために、今までどおり、力まかせに強迫的に働くのをやめようと思う。そうではなくペースダウンして自分のより深い個人的問題を見つめることが自分にとっては必要だと思う。もちろん、いつまでも個人的内省ばかりにかまけているとか、隠遁生活の正当化に至ろうとしているわけではない。そのバランスで、〈スピ・シン主義〉といている。後期ロジャースも、カウンセリングのなかにある社会問題を個人の問題、身近な人間関係や内面だけの問題にそらすのはだめと気づき、カウンセリングルームという「密室」からでて、現実社会の様々な問題に取り組むという社会性を持っていった。トランスパーソナル系、社会的ワークショップ系、良質なカウンセリングや心理学はみなそうした方向性をもっている。まともな人は、社会性と個人的心理的アプローチとのバランスに至るのである。

自分の無意識に近づく

自分の〈ぎりぎり〉を見つめ自分を深いところから解放していくためには、ある程度意識的な試みがある。先日、あるワークショップに参加して、自分の〈ぎりぎり〉を見つめることができたので、その一端を紹介しよう¹⁰⁾。

そのとき僕はある人との関係で引っかかるものをもっていた。相手はかなり拒絶されたのだが、僕の主観としてはそれは相手の勝手な誤解だという感じがあったのだ。でももうその人と関わるのをよそうと思う気持ちがあり、他方で、でも友情関係を大事にしたいという気持ちもあった。スッキリしないそういうところで僕の〈ぎりぎり〉が発動する。

「嘘を言わずに人と向き合おう、嘘をついて逃げちゃだめだ、自分の感情に正直になる、仮面をとっていく」というのがいいというのは、頭ではわかる。でも人との距離を考え、傷つくのを恐れる僕は、「じゃあ、何でも言えばいいのか。そのように真正面から正直に言えば傷つけあうのじゃないか」等と思い、両者のバランスを考えた。

人と近づくのがいいというが、こちらから積極的にこころを許していけばいいと思う反面、そんなのは、なんか近づこうとしすぎて気持ち悪がられる、下心があるとか媚びているように思われる、恥ずかしいという抑制の気持ちが僕にはあった。あまり介入しすぎず、待っていたって、向こうから来ればいいじゃないか、そのとき受け入

10) このワークショップについては、松井 [1999] を参照のこと。

ればいいじゃないか、と思う気持ちがある。それに人と深く関わるように近づくのは、じゃまくさい。しんどい。ほかにすることあるし、という気持ち。これが僕の個性で、そうじゃないと無理がある。自然じゃない。そこまで労力かけて得るものが小さいのでは。そんな言い訳の気持ち。

拒絶的に対応されたとき、その理由を探るように相手に関わると、結局は双方が傷つくのではないかという恐れもある。誤解されるぐらいだから、どうせ関係はよくなる。だから聞かないほうがいいだろうという感じ。人が徹底的に語り合えば分かり合えるというもんじゃないという諦念がある。共同体的理解が無前提にあるわけじゃないから、と思っている。

だが、いや、それじゃあ変わらないし、傷つくのを恐れず、もっと積極的に自分を開示するのがいいのではないかとも思う。「距離をとる」といって、最初からかわらないのは、逃げている。深い理解の芽を摘んでしまっている。話せば誤解が解けて、相互の理解が深まるはずだ。本当に相手を悪く思っていたり悪意をもっているならダメだが、そうでないのに否定されている状況に甘んじているのは、双方のためによくないし、もったいないじゃないかとも思う。

だが、全体としては僕は腰が引ける傾向がある。受け入れてもらえる人には近づけるが、拒絶されていると思うと、チャレンジするよりも離れるほうを選びがちだ。

ワークショップで、自分のそういう両面を掘り下げの中で、僕のそういう消極性・防衛性に気づくだけでなく、それを変えたいという欲求があることに気づいた。思い切れば、楽しくなるよ。消極的に、閉じこもっているだけじゃ、いまのままじゃないか。変わらないじゃないか。向こうの人も待っている。恥をかけばいいじゃないか。結果は向こうが出すんだから、こっちがあれこれ心配せず、動き出せばいいじゃないか。相手は好きな人で尊敬し、大事な人なんだったら、誤解を解けばいいじゃないか。なぜ反発するのか、聞く価値があるじゃないか。傷つくかもしれないが仲良くなれるかも。反発されるという経験のなかでこそ、日ごろの穏便な生活では隠れていたものが見えてくる可能性がある。てこずる人とかかわりの中でお互いの深い本性がわかってくる。自分も相手も成長する。

自分の気づいていないダメなところを指摘されて傷つくのが怖いと無意識で恐れているのだろう。コテンパンに言われて、相手やみんなに最低のやつとおもわれるのがいやと思っている。最低のやつと思われてでもやってみるか、それを恐れてやめるか。

そう指摘されれば、当然僕は、チャレンジしてみたいのだ。人は同じじゃなくて当然で、感じ方が違っていいじゃないか。そこから人間関係が始まる。僕は多様性といいながら、異質なものと交流を逃げすぎじゃないのか。

そしてそのように防衛的になることの背景には、僕は感情を軽視しすぎるという問題があることにも気づいた。「自分をコントロール」すべきで、「感情的なのはダメ」とおもう傾向が強い。感情的な人を低くみてしまう。「大人じゃない。成熟していない」とみる。その思いは実は自分の感情についてもあてはまっている。

だが、人は完全じゃない。エンパワメントという限り、完璧じゃない自分の感情に付き合うこと。そう感じていいのだと許して認めてあげること。体や感情の声に耳を澄まして正直になること。「いつもニコニコで穏やかで冷静」がいい訳じゃない。それはいいこちゃんになっている面がある。その瞬間瞬間に感じている快・不快、緊張、心の動き、体の感覚を自分にとって価値あるものと認めることが大事。そういうことを学んだ。

感情の抑制は必ずどこかで爆発したりゆがんで出てくる。体や感情のメッセージに素直になればいい。病気もメッセージ。そんな自分を愛することが大事。それが内側をみるということ。今までは外の基準に自分を従属させすぎていたのだ。

とするなら、相手との関係で、自分が傷ついたなら、その傷ついたということを見無視するのはよくない。自分は傷ついたということを出せばよい。相手はそれを受けてまた反応するだろう。思い切って相手に本音を言うのは、相手を否定することでなく、自分を大切にするためだ。相手との関係を大事にしたいと思う気持ち、言い換えれば相手への「愛」があれば、自分の思いを出しても通じる可能性が高い。通じなければ仕方ないが、はじめから抑制するのは、結局自分をしんどくさせるのだ。僕は、自分と相手の感情を受け止めるというあたりで、自分の成長の〈ぎりぎり〉を見出している。

僕はもっと、カラダで、「近づいてもいいんだ、受け入れられるんだ」ということに慣れる必要がある。なんか「媚びてるとか、無理に近づこう、づかづかと侵入し過ぎ」と感じたけど、そうでもないじゃんと経験すること。ええカッコせず、自分をどこまで開示できるか。相手も閉じがちだから、こっちから扉を開けるようなチャレンジをしよう。そうやって相手との関係をつくっていきける自分になろう。それが僕の課題だ。

まとめ

以上の記述で言いたかったことを整理しておこう。〈たましい〉とか「社会性ある行動をしよう」〔孤独〕を受け入れた、自立したシングル単位人間になろう」などというところ、〔きれいごと、偉い人、仙人のような人〕「固苦しい理屈」の話ととられがちである。そこへの警戒が過去の僕には不十分だった。正義を語る人、左翼、先生的な傲慢さの面が僕にあった。「二者排他性」の問題でも、シングル単位論に賛成しかねる人が「実感がついていかない」ということに対して、頭悪いとか、意識が古い、ダメな奴と見下している面があった。しかしそれは、単に、古さ、ダメさではなく、リアリティなのだ。その裂け目をもっと見つめないで、さっと、きれいな方だけにいきがちなのが、狭義合理論としての「シングル単位論」の弱さだ。僕自身、その弱さを反映して、自分の病気などがあったのに、そこを深めてこなかった。

だが、隠し味としては以前から僕の主張には、〈スピリチュアリティ〉があった。そのため、僕の話や本の行間を深く読み込んでくれた人は、シングル単位論の中にある豊富な〈スピ・シン主義〉的なことまで含めて共感してくれたが、そこまでみてくれない人は、シングル単位論の「一面性」を嗅ぎ取って反発したのだ。

だから、いま僕が、スピリチュアルな領域を扱うとか、〈スピ・シン主義〉を主張するというのは、そういう限界を克服し、〈混沌の闇世界〉の問題をも射程に入れようとしているということなのだ。それが、自分の矛盾、弱さ、闇を具体的に見つめて書くということだった。きれいごとでないものへ行きたいのだ、僕はこんなに矛盾しており、アナーキーで、そこに僕の〈たましい〉も顔を出しているのだと示したかった。

恋愛・セックスでのすっきりしない面、人間関係でうまくいかないこと、病気（ガン、緑内障）、評価されないというコンプレックス、「能力」のなさ、学問のダルさ、思い通りにならない教育実践、社会運動の広がりなさ、旧態依然の古いスタイルの運動、障害者介護に関わることのしんどさ、等々に、向き合って、僕の裂け目、くぎりぎり）をみつめることこそ、きれいごとでない〈スピ・シン主義〉の豊富さなのだ。

もちろん、ダメだ、矛盾している、と否定的にだけみているのではない。シングル単位論には、科学でも宗教でもない、新しい方向を大きく指し示すモノサシ・理念型としての意義があった。いろいろ複雑で、言い切れないことも多いけどその中で考え抜いて、今の段階でこうだと言い切る決断の必要性を強調したし、それには意義もあ

る。

めざすのは「バランス」であり、個人の生き方・価値を押し付けない、真理としない、「押し付けたくないよ、聞いてほしい」というスタンスだろうとおもう。それが、積極的な「価値」である〈スピ・シン主義〉だ。以下、そういうことをふまえて、僕自身を振り返り、どう生きていくかに関して考えたことを書いていきたい。

2-3 僕自身の個人的方針の確立

(あ) 一般論

外へ出たい！ OUT！

大学の教員、研究者という肩書きをもつ僕だが、1に書いたようにそろそろそのことと自体を見直したい気分になっている。この拙稿もそうだが、専門的でない、論理的にかっちりしていないものを書くとき低い評価しか受けないと分かっているけど、書きたいものを書きたい。そういうことを気にするようなことをしたくない。こう分析（記述）したら頭がよくみえるとか、専門家・学者として評価され、文句も言われず、この業界での出世もしやすいなどというのがみえる。しかし、どうみても、少し視点をずらせば、学者の世界で評価されることなどになんの意味も興味もないことが分かる。他の人の「活躍」をみていて、白々しく感じているんだから。別にあんなふうになりたくねーよって。

すばらしいものも少しあるが、多くの専門的論文や評論にほとんど存在価値がないことは明らかじゃないのか。多くの学者が自分の領域をとくとくと語っているが、ほとんどそれは自分の認識の狭さ（総合的視点がない、いかにそれがどうでもいいことが分かっているし、あなたでなく他の人が言えるようなことを言っているだけ）を告白しているようなものだ。人より先に少し「なるほど」みたいなことをいえても、だからどうなのか、ほとんど世界を変えてないじゃないか、というのがほとんどだ。本とか出して、社会的発言して、そういう役割でお飯食^{まんま}ってる、バラサイトしてるだけじゃねーかという思い。代わりなどいくらでもいる。まさに学者もまた「透明な存在」なのだ。

そのとき、それを自覚しないで、その世界に浸るほど愚かではいたくない。かといって「透明な存在」のままでもいたくない。とすれば、他者の評価や喝采等を切り捨て、自分の一番と思う道を行くしかない。メディアをみていて、いつまでも皆が「実

際の政治・経済」というお釈迦さんの手のひらの中でチョロチョロ動いていて同じことをしているのを見て、僕は「絶望」している。僕はもうずっと前からそんなことに興味と期待を失っているのだ。

また、なかにはまともな論文や批評もあり、それは社会をよくしていくとか、人権侵害されている当事者の闘いに有用だということはあるが、ぼくは学者・研究者・先生という地位にあるものの、そういう「書くこと」だけを中心に活動したいのかなという問題がある。それだけじゃないだろ、俺の個性はどーなんだという思い。違うことをしたいんじゃないのかという問い。

じゃ、この文章はどうなのかという問題も出てくる。半分自己満足に過ぎないということは自覚しておいた方がいいだろう。長々と書いているが、ぴしっと切れ味鋭くまとめきれてない。行動の指針にまで煮詰まっていない。ようやくヒントが少し散らばっているというような感じだろうと思う。これをベースに今後、どう実践して生きて、死んでいくか、にかかっている。人生はプロセスであり、今はまだ途中だ。

少なくとも〈スピ・シン主義〉という議論は、僕が、自分でいってきたことの落とし前をつけるためにシングル単位論を進化させて、自分と他者の通路を開こうとするものだ。ノンエリートの自由追求という課題を、自分の問題として考えている実践だ。例えば、こういう事だ。先日、平日の昼間、駅近くの公園で暑いのにスーツを着て何か仕事関係の電話をしている若いサラリーマンをみた。彼は仕事が楽しいのだろうか。営業先で、頭を下げているのだろうか。それが彼のしたかったことなのかな。

もちろん、十把一からげには扱えない。悲喜こもごものなかには、決して外からではわからない、幸せややりがいというものがある場合もあるだろう。

でも……と僕は思う。僕はしたくない。そしてそんな思いの人もたくさんいるはずだ。だから僕は、そんな同類の人に応援歌を書きたい。同時代、同じ思いをもつものとして、考えた先の方を書き記したい。どう生きるか。どう、「外へ出る」か。OUT! と、生きたい。だから、〈スピ・シン主義〉について書く。

どのように生きるかの具体像が見えにくい

「まわりの人の小さな操作された生き方、能力主義的な姿勢がいや」[A] という感覚に、嘘はない。それはそう思う。しかし、僕の中にもそういう面があることを認

めることを忘れちゃいけない。

次に、それに対抗する生き方として、「強度あるもの、楽しいものがアートだ」というところまでは分かるが、その具体像が見えにくい。僕にとっての具体的方針が見えにくい。燃えるものが見つかりにくい。アートのことをしたい。闇に関わる「取り乱し」的〈ざりざり〉なことをしたい。映画作り、本づくりもしたいし、身近な人間関係でもいろいろ挑戦したいし、社会運動でも新しいスタイルに挑戦したいし、ワークショップ的な形で〈スピ・シン主義〉意識を広げる活動もしたい。

だが、欲望に沿って面白いものを追求するとき、〔A〕の面と重なる時があるので、注意が必要だ。質が問題だとはいえるだろう。「強度」追求（＝夢中になることを求める）だけを見ていると、知らぬ間にファシズム・能力主義・優生思想肯定に陥っていることがあるという危険性を忘れないようにすること。競争も戦争も差別も楽しい面、創造性の面があるのだ。

僕はどう生きたいのか。僕は保守的なものは嫌いだ。ここを譲る気はない。だがリアリティを大切にしたい。つまり〈混沌の闇世界〉を射程に入れ、矛盾や〈ざりざり〉や直感や体や心の奥深いものを大切に生きたい。単なる「とり乱し」でなく、もっと高いところ、社会性ある繊細さへ、至りたいと思う。

悔いなく生きたい。それはどういうことか。充実感獲得のため常にチャレンジして生きていきたい。そのチャレンジは世俗的な成功を目指すものでなく、自分の人格を高めるといふチャレンジだ。自分のだめなところを減らし、変えていき、少しでもまともな人間になりたい。つまり僕は自分の人格を高めたいのだ。高みを目指したいという感覚がある。それが社会全体をまともにするこゝとつながっている、同時的課題だと。そういう言い方はできる。それが人生の目標といってもいいかもしれない。で、その具体化は？

完璧なマニュアルはない。何度も言うように、バランスだ。ヒントは、一つ一つを丁寧に深めればどこにでも「アート」はあるということだ。すべての人間関係、家族（その意味で僕は家族愛情否定主義者ではない）、定職（正規職。僕の場合大学教育職。しかし忙しい）、今関わっている社会運動、すべてにやりがいはある。他方、思い切って「外へ出る」こと、新しいことに挑戦することも間違いなく「正しい」選択だ。間違いなんてない。

形式的にどっちが正しいというのでなく、どこにいこうとも「スピリチュアルなものを見つける質」が問題だ。しかし、同時に、より自由なところへ行くことは大事なので、今までの成果を踏まえて「次」に行きたい、今の生活スタイルを変えたいと直感している。狭義の大学教育とか、論文書き（学問的闘争）とか、労働運動とか政治とかは、今の僕には色あせた感じがする¹¹⁾。僕には、「狭く」なったのだ。この感覚に嘘はつけない。

個人的な生活自体を大切にするのは確かに大事なことで、何気ない日常生活がくだらない、退屈などというのは、鈍感であるにすぎない。日常のその中に痛みと喜びと創造を見出す能力が必要なのはまちがいない。そして当然、そのセンスは、狭義の個人生活の細やかさだけでなく、社会性においても発揮されなくては僕らは「全体性から断片へと分裂」されたままである。だから拙稿 [2003] では、新しい社会運動をどうするか、それに個人はどうかかわるかということを重点的に考えている。

「外へ」でるノンエリートになりたい

僕は、口で言ってたことの3割ほどしか本当にはわかっていなかった、というか、実践できていなかったように感じる。それがこの7-8年徐々に変化し、いまは、だいぶ身体性を取り戻して、5-6割分かってきた感じだ。人間関係の楽しみ方がわかってきた。さまざまなことに「時間をとられる」、「もっと頑張って活動しなくては」という発想をもっていたが、そのこと自体が追い立てられていたのであり、僕が乗り越えるべき課題に関わっていた。出来合いの知識を覚えさせるような側面を十分に排除できていたかという、そうではなかった。自分の知識=財産を相手に「教えてあげる」という、ある種の「施しの発想」が隠れていたと思う。これは「自分は賢く、人よりも優れている」という無意識の表れだ。自分はたいしたことのない、普通のダメなやつだという自覚が欠如している。

一般的に言って、初期の頃、多くの人には純粋な気持ちをもっている。しかし、成功し、人々から誉められ、持ち上げられ、素晴らしいと評価され、権力をもつなかで、エリート的な意識をもちがちになるのが、人の常だ。例えば、低レベルの学者・評論家、政治家、宗教指導者、カウンセラー、医者、芸能人・有名人などの成り上がりの

11) これは「僕にとって」ということであり、社会全体にとっては有意義な活動であるとは、今でも思っている。

人は、途中から「自分は特別の才能ある人間だ」と思って自分は偉いと錯覚し、「この偉い私が真髄を教えてやるから、金よこせ、感謝しろ」となる。自覚していなくても無意識にそうなっている人は多い。それが偉そうな態度となつてにじみ出る。自分のサービス・商品の提供に対して、高額のお金を受け取っても当然と思う人は、大体、この病にかかっているとみた方がよい。つまり、今の社会で高収入を得ているということには、何かしらのヤバサがあるとみて当然である。

人が元気あるときは自分に自信が溢れている状態だろう。エンパワメントという概念を考えるなら、自己肯定や自信に溢れていることを一概に否定はできない。でも、今の僕の強調点は、よりエリート的であるものは、自分が有能だという意識を捨て、権力を減らし、謙虚になり、自信をなくすぐらいでちょうどよくなるということだ。だから逆に、社会的に力を奪われ、自尊心をなくしている人は、他と比べるのでなく、ありのままの自分のいいところを肯定して自信を取り戻せばいいと思う。

人の後ろを歩くことも大事だ。文脈によるが、僕の主張の文脈でいくと、「鶏口となるとも牛後となるなかれ」というのは、間違いだ。エリート＝成功者は、「強い」ようだが、自分の感情を抑制し、挫折に弱く、他者の痛みにも弱く、変化に適応できず、その意味で、かたくて、もろい。ノンエリート＝〈弱さきもの〉＝敗者は、挫折ということを知っており、だから他者の痛みに共感しうる基盤が広く、適応力をもちやすく、その意味で、しなやかな「強さ」をもつ可能性が高いといえる。

しかし、このことは、もちろん、現実の敗者がすべてそうなのではなく、可能性のことにすぎない。一方で、僕たち普通の人間は、支配されたいものなのだという面があることを忘れないでいたい。権威に従って自分を守るといような、マイホーム的従属指向がある。それと皆を上から支配したいエリートとは一対、セット、裏表の関係にある。みんなが弱くて、みんなが強い。

だからこそ、目指すのは、僕は社会を構成する人、ひとりひとりが、支配される快樂から離脱するような、自立人間になることであり、優劣で自己確認しないような、セルフエスチームのあるエンパワメントにいたることなのだ。それは、ある側面では、自分の気持ちを穏やかにする能力をもち、自分に自信と自尊心があり、それゆえ孤立を恐れず一匹狼的雰囲気をもつということだ。

失敗が怖いから、変化なく、思考停止し、「内側（現状）にとどまる」のか、悩み、変化し、動き、失敗しても再び立ち上がり、「外に」出つづけようとするのか。それ

をたいしたことのない、弱い自分と自覚しつつ、行えるか。その課題が、エリートであろうと、ノンエリートであろうと、僕ら全員に、課せられている。

たかが知れてる自分、その自分にできること

そう考えると、僕自身、反省の日々であり、昔より自信がどんどんなくなっていく日々だった。競争秩序でもっていた「元気よさ」の幻想性を自覚するということは、足元から崩れていくことである。それは必要なプロセスと頭ではわかっても、簡単に「新しい意味での元気さ」を得られるものでもない。また、得たとしたら、疑ってかかかった方がいい。この元気さは、どこからくるのかと。

教師、講演者、運動家、理論家、研究者に向いていないんじゃないか、あるいはそんなことしていいのかと思うときが時々出てきたのも¹²⁾、自分の体力のなさに気づいてきたのも、40歳前後。死ぬまでに何をしたいかと考えるようになった。ある本に載っていた、病気で死ぬ前にある人が言ったことが頭にずっとある。「生まれ変わったら、田舎で、心が傷ついた人と黙って畑でも耕しながら暮らしたい」というやつ。そういうのに触れるといつも思う。「無名のたいしたことのない普通の存在」でいい。ブルーハーツがいうように、無名でいいから、楽しく、真実に近いところで生きたい、と。

もちろん、自信と元気さをなくせばいいというだけが目標じゃない。いったん、自分のなかの隠れた能力主義に向き合ったあと、奪い合い・優劣でない、「与える」「与えられる」という快樂をカラダで身につけられるかということこそが真の挑戦課題なのだ。「与え」ても減らないものだということ。「与えられる」という快樂を受け入れるしなやかさをもつこと。自分の知識や能力などたかが知れてる。他の人にでもできることがほとんどだ。

その上で、たかがしれてるタダの僕なのに、「そのたかがしれてるあなたは素晴ら

12) 素晴らしい人は、素晴らしい作品を作ったり、素晴らしい実践をしている。例えば、会議でも「さ、やりましょう」と最後の一言で、みんなを明るく前向きにすることが出来る人こそリーダーなのだ。だが僕にはできない。そういう力がない。政治家に全然向いてない。教師もダメ。運動を引っ張ったり、スピリチュアルに語り、人を勇気付ける力などない。素晴らしい生き方をしている人、素晴らしい存在感ある人がいると知ることは、自分がそうでないということを知ることでもある。

しい、大切な人だ。必要な人だ」といってもらえたら、それは嬉しいことなのだろうことだろう。たかがしれてる僕に、本当に何か大切なことができたなら、それはまともな人に少しなれたということだろう。そうした地点に至れたら、僕はうれしい。それが、自分をエンパワメント水準で、受容することだとおもう。

実は〈弱きもの〉こそ、“もの”がみえてくるのだ。人生を楽しめるのだ。人生はちょぼちょぼで、いつか朽ちるもので、死んだら終わりで、一時期、売れた、有名になった、儲かった、権力をもったなどというのはうたかたの夢のようなものだ。

それがわかったあとで、それでも、死んでも“歌”は残る、という気づきにいたることだろう。それがスピリチュアルな視点だ。他の人でないこの自分が有名になるのではなく、全体の一部である私が、全体の輝きの発露として、スピリチュアルな活動をすれば、それが自分にとっても、皆にとっても価値あることだというバランスある気づき。(それが全体主義への個人の奉仕にならないよう注意するのは大事な点であるが、「俗」の肯定視点とシングル単位という形で、リアルな個人の尊重を忘れなければ大丈夫だろう。)

内側に向かうために、「外部」に出会うこと

僕はスピリチュアルになるということ「繊細に内省する」というような表現でよく示す。だが、これは、ただじーと自分の内側を見つめればみえるというもんじゃ無い。無意識は何かうまい手立てがないと見えにくい。考えすぎて自家中毒になることもある。むしろ、無意識に出会うためには、自分の外部の刺激を利用する方がいいことが多い。

旅行、映画、本など、自分の「外部」的なものに出会うことで、自分が見えてくる。何か動いてみる、作ってみるということで、日ごろ日常生活では気づかない自分に気づく。日常という小さなところ(役割、人並み)にとどまっていた、「他者」「外部」「異物」と出会わないと、自分の潜在的なもの、自分が求める本当の自分らしさには出会えない。

見知らぬ町(環境)で見知らぬ人(モノ、デキゴト)と出会うと、ピュアに自分のいいところが見えるとか、自分の違う面が見えるってことがある。「知ってる人」「日常の狭い関係」だけでは、見落としがちになる。旅先では、自分を偉く見せなくてもよいということが影響するのかもしれない。名前を知らない通り過ぎの人にもいいと

ころがあることがみえるということは、実は、日ごろ接している人にも、また日ごろは見えていないいい面があるということである。旅先でなら、挨拶したり微笑んだり、たったそれだけのことで幸せになれたりする。だから自分も、とらわれの日常の網（肩書き、権力関係、過去のしがらみ）から離れて、旅先での出会いのような新鮮な目で見れば、見えてくるものがあるし、新しいこともできる。

自分の「知ってる人」以外の人との関係をもととしない、閉じた姿勢こそが問題だ。無意識に自分を閉じ込めていること自体に気づくことがある。だから僕は、自分をあえて、異物に接するところにもっていかうと思う。安定した地位で、いつものことをやっていけば、順調に進んでいくというような環境自体を壊していきたい。

求めるものは、「私への肯定」

人が、つらいのに、いいたいこととも言えず、解決策も見えず、やるかたない思いが一杯で苦しい、というときがある。そういうとき、人は、「答え」を求めているのではなく、同情や叱責やアドバイスや反論や励ましや対応策でなく、自分の言葉を、気持ち、発想をそのまま受け取ってもらいたいのだ。否定でなくとりあえず存在を肯定されたいのだ。ここでいう肯定とは、「正しい、正しくない」という判断（ジャッジ）でなく、「あなたはあなたのおもうようにおもっていいんだよ」という存在そのものへの、多様性への肯定である。「あなたが何をとおもおうとも、それはあなたの自由であり、それを尊重するよ」という、尊敬感ある態度を求めている。「あなたがどういう人でも、あなたという存在は大切だよ」という言葉と態度である。

そういう聴き方、関わり方を、以前は否定（少なくとも軽視）していた。現実を変えずにただ気分を紛らわす「逃避、ごまかし」として。だから早く「結論、対策、正解、政策、対応」を出そうとして、いらいらしていた。あるいは、よかれと思って、相手に代わって整理したり、早く提案をしたりしていた。時には甘えているとか時間の無駄とおもってきた。どんな人間でも矛盾あるし、だめなところもあり、またそれがその人のいいところや味わいに繋がっている、言いよどみや沈黙にもメッセージがあるということを認められずに¹³⁾、「こいつはダメ、たいしたことない」と思うと切

13) 人のコミュニケーションは何も「すっきり、適確、合理的」がいいわけじゃない。説明が上手いか下手か、無駄なことは云わない方がよい、と単線の評価基準でみがちであったが、わかってきたことは、「下手な説明」も、無駄そうに見える話も、ズレる

り捨てていた。尊敬するところや面白がれるところを見つける努力をしていなかった。直感的にすぐに、嫌なところやだめなところを嗅ぎ取った。それが自分のセンスだと思ってきた。自分の実存のあり方は少しわかっていて、それもありとおもうが、他の人のあり方もありなんだ、とはわかっていなかった。

しかし、今、〈たましい〉が見えてきて、そうでないこと、つまり多様性とか、「ただ聴くだけ」の意味が見えてきた。僕の価値観に沿った答え、対応策だけが「良いこと」ではないのだ。聴くこと自体にとっても大きな意味があるのだ。だってそれで、心が休まるから。それが人間の存在のありかただから。つまり、〈たましい〉で呼応してほしいのだ。感じてほしいのだ。私の〈たましい〉を。人はそれを求めている。だから「言葉をそのまま受け取るような聴き方、存在の仕方」が重要なのだ。

僕の方針としては、そういうことを心がけて、出会う一人一人としっかりと時間をもちたいと思う。どんな人からも——実際には「皆から」は無理なので、少しでもいいから、素晴らしい人に出会って、その人から——面白いところを見出して、驚いたり楽しんだりしたいと思う。センスの合う、合わないは当然ある。でも、よいところやスピリチュアルな部分が出るかどうかは、僕との化学反応次第なのだということをおぼろげに忘れないことが大事だ。要は、相手ではなく（それは僕にはどうにもできない）、僕自身の態度全体こそが問題なのだ。繊細な「気配」をもっと深く掘み、即興的に対応できる力をもって、接したいと思う。

相談する、されることを大事に

以前の僕は、誰か友達などに弱音をはいて、それを聞いてもらって、慰めてもらうとか同情をかうようなのがイヤだった。そういうこともあって、人にも相談しないタイプだった。できるだけ自分のことは自分で解決しようと思ったし、実際そうできたのでそうしてきた。他人にあまり期待しておらず、相談したからどうにかなるものでもないだろうと思ってきたし、相手を自分のことで煩わせるのが悪いという感じもあった。「鈍感に、自分の側の一方的なことだけを相手に聞かせるのが悪い」と感じていた。そんなに鈍感になりたくなかった。また相手は僕のことという他人事にそんなに興味がないだろうと思っていた。僕が相手に対して深いところではあまり関心がな

のも一つのコミュニケーションなのだということだ。そうであるからこそ、伝わるというものがある。

いように¹⁴⁾。

そんなふう「相談する」ということのよさが、前には見えていなかった（自分の弱さを見つめるということの大事さもわかってなかった）。だからその裏返しの「相談される」ことについても、以前は意義が見えていなかった。つまり、他の人が自分に相談してくれたときは、うれしいと思うときもあったが、とことん関わろうという気持ちはとても弱かったように思う。あんまり干渉するのはよくないとか、「心配しているふりをして実は人の悩みを楽しむ」ようなのはいやだと思っていた。深い闇の部分では、自分の時間やノウハウを人のために使うのは「自分の損」だというようなエゴイズムの感覚、〈所有する者〉の発想をもっていたんじゃないかと思う。エゴな僕は今でもそういう感覚がないとは言い切れないと思う。

しかし、「相談する、される」というのは、心を開いて、本音の面、弱さの面、心の奥の柔らかいところに触れあうことであり、「人の喜びが嬉しい」というつながりを感じられる行為だと思う。そこから敷衍すれば、相談だけでなく、話し合いでも講義でもコミュニケーションというものにおいては、知識とか指示を押し付けるのではなく、結局人は「自分のことを語る」ことしかできないし、それを通じて、共感しあうことがいいのではないか。自分のことを話して自分が救われたり、自分が必要とされている（人に役立つ）という感覚によって自分が救われるということだろう。

14) ただし、他者意識とか距離感といった点で、ここに述べたような感覚にも僕は一定の意義があるとは、今でも思っている。例えば友人の友人が病気になったと聞いて、僕はどう感じたか。とっさの反応としてはかわいそうだなという感覚があるが、それは浅いところでのものだ。本音をみてみれば、僕にとって、それは他人事だ。僕は冷たいと思う。だから、他の人にとっては、僕が死ぬことは（身近な人以外には）、他人事だろうと思う。優しい人はもちろんたくさんいる。僕が死んだら、よく言ってくれる人や悲しんでくれる人はある程度いるだろう。でも、僕の感覚に、そういう距離感覚はある。多分、僕は自分には少し繊細なのに、人に対してはそれほどでもないという面があるのだ。つまり、鈍感なのだ。自分に繊細なのはいいが、自分だけ犠牲者のように考えるのはサイテーだ。一番鈍感だ。そうならないようにしたいと思う。

でも、もしその友人や、友人の友人に会えば、そして話せば、知れば知るほど、悲しみに同調するだろう。それを否定しているのではない。想像力を通じて痛みを共有するということは十分可能と思う。鈍感な僕でも、沈黙してゆっくりと時間をかければ、相手の〈たましい〉に近づけると思っている。悲観的というよりも、そういう冷めた感覚がある。

人が暗いところにいるとしたら、一緒の時間や映画の力や言葉の贈り物を使って、苦しみを和らげることがあるだろう。悩みに答えがすぐに出なくても、でも、あの人が相談に乗ってくれたということが嬉しく、それで元気が出るということはある。そのとき伝わるのは、「答え」ではなく、〈たましい〉のエネルギーだ。

前は、理屈ですっきり言えるような「答え」を出すこと、答えを与えることとか、「下」のレベルを早く解決して、早くもっと「上」に行くことが重要と思っていた。どんな話であろうと、結局もっていかうとするゴールというものがあり、それは、「あなたの問題は社会構造（あるいは理論一般）の問題で、だから社会問題（理論勉強）に関心をもって、社会改革運動をすること（理論に合わせた解決）がよいこと」というものだった。ひとりひとりの状況から考えるというより、「正しい結論」を誘導するようなものになっていた。「理屈・学問＝一般論＝すっきり」の方が、「個人の具体的な悩み・問題＝ぐちゃぐちゃ」より、上級と思っていたのだ。

でも、本人が時間をかけて自分で悩むことこそに意味があると分かってきた。優等生的に、形としての「答え」に早く到着するのがいいことではない。個人の問題という具体性には、「学問＝一般論」よりも〈豊かさ〉が含まれているということだ。すっきりしているということは引っかけも少なく、スピード速く表面を滑っていく。それに対し混沌たる具体性には豊穡が隠されている。その意味で、「遅さ」にこそ豊かさがあるからだ。

僕の方針としては、「都合よく聞く、かってに先を想像して聞く、口をはさむ、すきあらば反論する、違いを見つけるために聞く」ということをやめることだ。深く聴く（＝傾聴）、つまり言葉の奥の形になりにくい気持ちまで含めて真に共感的に聴く態度で接すること、僕の文脈でなく、その人の文脈で聴いたうえで、僕の意見と交わるという順序を意識すること、あることはその人なりの真実だから「間違っている」と審判しないこと、僕との違いを豊かさとして感じることだ。そして、どんなことを通じようと、結局、自分が求める深いところのスピリチュアルな部分（自分の内面、無意識、〈たましい〉や自然や大きないのちのつながりを感じる喜びといったものと絡めてつかむことだ。出来合いの結論に至るのでなく、オープンになっておき、自分が感じていることってなんだろう、本当に話したいこと、求めていることってなんだ

ろうという問いをもって一瞬一瞬、局面局面を生きることだ。

(い) 具体化

僕は何がしたいのか

僕は何がしたいのか。したいこと（すべきこと）はあるし、それをしていると思っていた。だが、徐々に大学の講義にしろ、社会活動にしろ、それをしているも充実感が感じられないとか迷うことが増えてきた。これで満足していいのか。何か足りない、という直感ゆえに、落ち込んだ気持ち。

だが、考えてみても、教育や社会活動でやろうとしていたことは間違っていないと思えた¹⁵⁾。では問題はどこにあるのか。領域の問題でなく質の問題だ。何をしたいのかというと、濃密な時間、しかもスピリチュアルなニオイに溢れた関係の時間を持ちたいんだと確認した。それが大事。「大学の先生だから」とか「仕事だから」とか「やるべきことだから」という「外」からの発想でなく、僕はスピリチュアルな人との奇蹟のような時間＝濃い時間を持ちたいのだ、と。だから例えば授業も社会運動もそれに近づくような水準で使えばいい（難しいからいつもそうはできないけど、それをめざして）。

心をこめてやるしかない。僕にできることは、自分が気持ちよくなることだけ。元気がないなあ、こんな人（学生、同僚、学会や運動で出会う人）に言ってもしょうがないなあと思うと、余計にしんどい。嫌な人と会うとエネルギーが減る。だから、嫌な人には（できるだけ）会わない。嫌な人とはできるだけ時間を共有しない。嫌な人は無視する。皆が全員すぐにスピリチュアルなレベルを含めて完璧に同調する、意識が変わる、素晴らしい理想的な人になるなどというようなことはありえないのだから、少しくらい「成果・効果」がなくてもいいじゃないか。それでいいじゃないかという発想。

何をしたいのかと原点に戻って考える。楽しくやりたい。チャレンジ性あることをしたい。心をこめる時間を持ちたい。あちこちにいる、いろんな生き方をしている、

15) 「すべては修行なのだ」という見方は多くの人が言ってきたことで、確かに使いやすい発想だ。ということは、教育においても「学生はだめ」というのでなく、その条件のなかで、時間をかけてかかわることができるんだから、そこで「なにかを変え」られなくて、どこで社会を変えるのか、ということになる。

自由でステキな人と語りあったり存在しあったりしていたい。加えて、特に僕は文章を書きたい。考えて、それを文章にしたい。できればそれを写真なども含めて総合的に表現したい。

その合間に、旅行したり、散歩したりデートしたり、いいアートに触れ、本をいっぱい読み、うまいもん食って笑ったりしたい。また学者的な間接性から離れて、現実的に成果を実感できるような直接的・身体的なかかわりをもちたい。この世の構造的な差別の犠牲となっている人たちの抵抗・サバイバルな動きにかかわりたい。「助けてあげる」のではなく、自立の援助であり、未来の人間関係・未来の差別のない社会の雛型の実践を行いたい。

大学で働くということは、まず食い扶持としての仕事（定職）であり、次に学生たちと心をこめて人間的交流をする場、学びあう場を持てるということである。つまり「いい講義」をもちたいし、好きな学生と話をしたい。ステキな学生と話をして楽しかったという経験は何度もある。授業を真剣に聞いてくれない学生がいてもいい。あたりまえだ。たとえ一人でも、心をこめて聞いてくれて、必要としてくれて、出会える人がいればいい。そう思うと元気が出た。

社会活動も、新しい〈スピ・シン主義〉的なネットワークを広げるような質で行えればいいと思う。新しいことに挑戦したい。これまでのいろんなことを脱いで一から自由にやっていきたい。そう思うと元気が出た。

貧困をベースに社会を変えるという古い政治的発想から脱する

マルクス主義に代表される、過去の貧しい時代（近代化前期）の社会変革論は、大雑把に言えば、大多数の貧しい人々、力を奪われ不満をもっている人々を前提に、中核部隊が適切な方針とスローガンを与えれば、大衆は目覚め、大衆運動に熱心に取り組み、それによって大衆側が権力をとって根本的変革を行うことができる、あるいは運動の力（や選挙闘争の勝利）を背景に代行主義的に上から改革を行うことができる、というようなものだった。「上」にいて権力をもつと、より大きな悪を追放できるという前提があった¹⁶⁾。

16) 「古い封建的なもの」「強大な敵」を振りほどく、そのプロセス、闘い、努力、勢いにはパワーがある。正当性がある。しかし、「その先」を作ることができないと、そこまでの運動になる。戦後初期や高度成長期には、敵がはっきりしており、封建的とも

だが、高度成長が過ぎて、豊かな社会が続いた現代日本では、「大多数が貧困で不満をもっており、改革に熱心に取り組む」ということをベースにした運動は適切でない。それを示すために、社会階層を「上・中・下」にわけたモデルを使おう。

今の日本では、世の多数A割（例えばイメージでは5－7割）は、生活水準が「中」で、何とか既得権にしがみついている、そこそこ楽しくのんびりやっていた階層（仮に中層と呼ぼう）である。少数のC割（同じく1－2割）は生活水準が「上」の支配・エリート・特権階層（上層）である。そして残りB割（2－4割）が生活水準「下」の貧困・困窮階層（下層）である¹⁷⁾。

グローバル化、新自由主義路線を基本に競争社会が強化される中で、確かに古典的な貧困・困窮は増加しているし今後も増加するだろう。だから旧来型の社会変革運動者（政治家、学者、活動家）はこの「下層」B割の増加をみて、旧来型の運動を続けるだろう。しかし「貧困化が進んでいる。改革反対」という「下層の増大、多数化」に依拠した旧来型運動に展望はないと思う。

というのは、成熟社会になった日本では当面、「中層」は依然として多数派だろうし、その層の大多数は人権擁護や社会改革に対して無関心、時にはエゴな態度をとるだろうからである。今の主流運動は、「中層」と「下層」の利害の差への視点がなく、「貧困反対、解雇反対」といった「下層」対象の古い発想のまま、実は「中層」を中心にして、「中層が今ある状況、中層のライフスタイルや生き方・考え方」と対立しない運動、中層の利害を維持する運動となっている。したがって、「中層」の多くは、エゴのみである。

そんな「中層」が根本的な変革を目指す社会運動に積極的に参加するはずがない。その典型例は正規男性労働者中心の労働運動が女性・非正規労働者の権利擁護に乗り

思える古典的不当性と闘う運動でよかった。だが、低成長期・成熟期に環境が変化したあと、それに対応した「その先」を作ることができずにここまで来たのが日本である。男女関係、先輩後輩関係、慣習にみられるように秩序、序列、役割があると楽チンである。保守派は「型」（技術論＝父は威厳をもつ、キャッチボールがいい、食卓を家族は囲む）に囚われていて安易である。それと根源的に立ち向かうことが、成熟段階の課題であるが、それは外部の敵だけでなく、内面化された秩序・権威との闘いとなる。

17) この階層の比率はあくまで大雑把なイメージである。国民にあなたはどの階層と思いますかと質問したときの答えとは関係ない。

出す気がないことであろう。

しかも今の日本では、上中下各階層のほとんどが、高い水準の人権擁護社会の展望（希望をもてる社会イメージ）をもてていないがゆえに、不満はあっても、「こんな日本」は変わるはずがないと思い、「変える」ということの深いイメージをもてず、その意味で変える必要もなく現状しかないと考えている。

多くの人は、目の前のことに追われ、適当に学校行って、仕事して、結婚して、子ども産んでと、目先のみであまり考えない右往左往の生活をしている。今の政治がやってるのは、その人たちの代わりに、上から手を差し伸べて助ける、代行主義にすぎない。社会変革運動者が選挙を中心としてすごい努力をして、もし政治・社会システムを一定程度変えることができたとする、と、「中・下層」の生活水準は向上するだろうが、同情的・代行主義的にそういうことを行うことがよいといえるだろうか。その変革の質は「浅い質の変化」だ。しかもその変革はとても遠い道だ。その中で、活動に関わった人が疲れて、つぶれていくのを見るのは忍びない。

それでももちろん「上層」の生活水準を上げる必要性もない。愚かな自民党的政治でも、「上・中層」の生活水準は何とか維持できるだろう。バカな政治をしていても、ほっといても市場原理でそこそこいくだろう。市場原理批判をもてないので、今の民主党が政権をとってもベターにはなるが少しの変化しかないだろう。〈深い質の変化〉はないだろう。だから民主党が政権をとることというような、今の政治の枠内での選挙を中心とした現実的政治運動に全力を傾ける気には僕はならない。そんな中で「中層」の生活が少しよくなるようなことのために一生を奉げられないと思うし、「下層」のためになるように社会全体を権力奪取を通じて変革しようとする旧来型の運動——それは勝利を得られないだろう——に関わって疲れるのは魅力も説得力も少なすぎる¹⁸⁾。

それでもいいという「元気な人」はそれをやりつづけるのも一つの選択だろうとは思ふ。自己満足は大事な価値の一つだ。だが僕は、「下層」の人々のひどい権利状況

18) 社会運動にしろ、学習会・講演・授業にしろ、前衛党、政治家、先生、宗教家などは、対象の人々が自分たちのかかわりによって大きく変わったように思いやすい。しかし、その多くは自己満足だと僕は思う。浅く変わることはあるが、〈深く変わる〉ということはそう簡単に起こることではない。大学の授業などでもほとんど学生は「変わらない」と知らなければならない。

を本当に改善することを現実的に求めるなら、むしろ、社会全般を相手に無謀な戦いに苦勞し敗北しつづけ、せいぜい表面的な少しの改良を得る¹⁹⁾より、地域ユニオン運動や裁判闘争を通じて具体的問題に具体的に闘うと同時に、日々、僕自身が意味や充実感を得られる、「下層」の一人ひとりへの具体的関わりの方がよいのではないかと考えるようになった。

社会の根本変革の賛同者を大幅に増やして全体改革するのはとても難しいので、そうだとするなら、せめて、孤立している、まともな「同類」の人たちに、メッセージを出して、助け合いたいと思うようになった²⁰⁾。「上」のほうから一挙に改革を狙うとって敗北しつづけるのではなく、地べたの方でこそ、何か大事な「闘い」ができるのではないのかという感覚。

大切なことは、一人ひとりの「深く生きる質」＝「人権意識の〈スピ・シン主義〉的向上」であって、そうした人が増えるという「社会の底上げ」が真に求めるものではないのか。一人一人の切実な自己変革こそ意味があるのではないかと。そしてその可能性（潜在的欲求）は「上・中層」の人々ももっているという意味で、「下層」の貧困性だけに依拠しない、広い基盤の新しい運動ができるのではと考えるようになった。それは、僕自身の生き方の質、関わりかたを変えるということ（自分のとらわれに気づき、自分のエンパワメントへ）と同時的課題で、だから義務感とか他人事ではなく、自分の問題として長く無理なく続けられる運動となる。

そうしたいろいろな意味で、今の日本で〈スピ・シン主義〉意識をできるだけ広げていき、狭い範囲にしろ未来社会の関係の先取りを実践することが、旧来型と違う新しいスタイルの運動の発想だ、現代の真の革新だと思うようになった。

打率6割をめざす

「伊田さんは、なぜ、そんなに反省するの？ 相手を傷つけたわけではないのに

19) それも現実的には必要ではないのかといわれれば、まったく必要であるというしかない。ただ、僕でなくとも誰かすると思うからこそ、僕は本書のようなことを考える。

20) 多くの「普通の人」は、愚痴をこぼしたり、浮気に怒ったり、金儲けだとかいいながら、それなりに友人と会話やメールで楽しんだりしている。その人たちを、「変えたい」のでもなければ、「助ける」のでも、「洗脳する」のでもない、とするなら、いえることは、「変わりたい人だけ、そうなりたいひとだけ、エンパワメントできるようにしよう」ということだけだろう。

……。」といわれたことがある。僕は自分の矛盾した両側面を見つめるってことを少し意識的にやりすぎているのかもしれないけど、前が鈍感だった分、今はちょっとそっちに重点がかかっているってことだとおもう。〈スピ・シン主義〉でめざすのは、暗く反省するばかりっていうんじゃなく、それを通してバランスよく全体性を回復することだ。

反省というより、僕は自分のスキルを獲得したいんだと思う。例えば森田ゆりさんの本には、トレーナーが自分の偏見に気づいていること、自分の立ち振る舞い・言動が思想を表しているっていうことを自覚していることという指摘があった。僕が今、自分をいろいろ細かく振り返るのは、自分の行動がまだまだ〈スピリチュアル・シングル主義〉じゃないってことを確認するためなんだと思う。目指したい方向はあるけど、体や行動ではまだまだ揺れてて、打率3割って感じで、これをせめて打率6割以上に上げたいなってこと。ステキな人の立ち振る舞いから学ぼうとするのも、それを目指してのこと。

次に燃えるものを探して「内面」へ

僕は、この7-8年、次に燃えるものを探してきたんだとおもう。いや、根源的にさかのぼれば、10歳ぐらいからずっと、自分の能力を限度いっぱい使って楽しめるものを探してきたんだ。受験とかスポーツだけじゃあ、面白くない。だから学問とか、左翼とかフェミといった反体制的な社会運動系にもいったし、ロックとか映画とかにもいったし、いろんな国への旅もして、そうしたことの古さや狭さも見えて、で、次を探してた。だから、あきらめて「フツーでいいじゃん」と居直ったり、いいこちゃんが一定の枠の中で頑張ってるのをみると、どーしてそんなつまらないことに一生懸命になれるのと思ってしまう。俺にはそれは「使えない」って思う。

映画も音楽もいいけど、じゃ、自分がのめりこめるものは？ 人間は面白いから今でもステキな人や新しい人から刺激を受けるけど、ずーと、完璧に面白いものがないなとさがしてきてて、大学の先生にもなれて、とくに本を書いて講演とかもしてある程度有名にもなって、社会運動にも少し関わって、充実感を得るときもあって、それじゃあ、次はってことで、この7-8年ほどスピリチュアルってことを考えて、人生の次の方向を模索中というところだろう。そして、おきまりのちょっとイイコトいいますう的な路線から、いかに離れてかっこよく自由に生きるかってことが僕の探して

るもの。

もう行った「国」はいいから見ていないところ、知らないところへ行ってみたい。それは外へ拡がるとか次々追いかけるだけじゃなくて、人間の、自分の、内側に降りる旅かも。〈スピリチュアリティ〉とか「スロー」という概念もそういう未知なる領域。セクシャリティもまだまだ未知なところがあって、僕には旅行してみたいところ。

コジコジのように力を抜く、バカになる

さくらももこさんの『コジコジ』というマンガ（さくら [1995]）がある。主人公の、大バカの宇宙生命体・コジコジが、ひとクセもふたクセもある仲間たちと、メルヘンの国を舞台に繰り広げるナンセンス・ギャグ作品である。

なぜ勉強するのかわかるかと聞かれて、「知らないよ、全然わかんないよ。コジコジは1回も勉強ってしたことないよ」という。「ふざけるな」と先生に怒られると、「ふざけるなって、ゲラゲラ笑いながらパンツ頭にかぶって走り回ることでしょ」という。自分の名前もちゃんと書けなくてテストではいつも零点だし、先生が職員室に呼び出しても、「ケーキでもくれるのかなあ」というような奴である。「勉強もせずに毎日何してるんだ」と怒られると、「えっ毎日？ あのね、空飛んで遊んでね、そんでおかし食べて山に行って遊んだり海にいったり遊んだりね、あと、寝たりしているよ」といい、それを聞いて先生がまた怒ると「えっ悪いの？ 遊んで食べて寝てちゃダメ？ 盗みや殺しやサギなんかしてないよ」と答える。立派な人を育てるために学校が無料で開かれていると諭されても、「学校はタダなんだね。安心したよ」という。あきれた先生が将来何になりたいかだけでも答えろという、「コジコジだよ。コジコジは生まれたときからずーっと、将来も、コジコジはコジコジだよ」と答える。

そんなコジコジは、いろいろな人や出来事にコジコジなりにかかわることで、意外な展開や「解決」をもたらす。例えば、ちょっとやんちゃなタコの弟の面倒をみるように頼まれて、コジコジは先生っぽくなく、その中で「その帽子変なの」といわれて「そうだよ、変なんだアハハ」、「おまえバカだろ」といわれて「そうだよ、よく知っているね。君は物知りだね」、「おまえ俺の面倒みるように頼まれてるんだろ」といわれても「そうだっけ？」などといって、指導もお説教もせずにただ弟を連れまわし、いろいろな経験をさせる。その中で自由に生きることを伝え、タコの弟は改心するのだが、コジコジはもちろんすっとぼけだけ。月に大切なことをお祈りするといふとこ

ろでも、皆が一番親しい大切な人を思い浮かべるときに、コジコジは通りすがりに会っただけのモグラに「元気でね」っていうメッセージを送る。そんなコジコジは、やっぱり万物の神様なんだなあと思者は思うのだけれど、作品中ではタダのバカでお気楽なコジコジとして、仲間たちからあきれられている。

コジコジのバランスは、みんなにさりげなく優しく、それが「フツー」にできていて、気負ったり、頭でっかちになったりしていない。フワとしたマイペースの感じ。誰からも尊敬もされず、何も悩んだり考えたりしていない感じを僕も目指したいなあと思う。エゴに生きてる人はもっと他の人のことを考えるぐらいにいろいろ悩めばいいけど、まじめすぎる人や社会運動は、もっと気楽にコジコジのようになればいいなあと思う。

例えば、人のことであっても「それはよかったねー」と思ってみれる気分の人になればいい。バカになる。人からうらやましがられない。無視されたり見えなくなってもいい。評価されなくていい。ジャマだけされないように生きる。人の上に立たない。金を持たない。せこせこしない。働きすぎない。人からお気楽なやつと思われるほどお気楽に生きる。人を非難しない。人のことで怒らない。説教しない。偉そうにしない。皮肉や冗談を言って楽しむ。

そんなのを100%実行するのは無理だけど、そんな感覚で生きられればいいなあと思う。人を非難したり攻撃したりせず、自分の基準で楽しくマイペース、でも、社会と繋がって人に優しい、そういうエンパワメント的な方向をさくらももこさんは、『コジコジ』で僕に思い出させてくれたと感じたね。

「庶民」をみる分裂した視点という問題

新聞に入っている折込求人チラシをみていると、週5日びっしり働いて、月に15万円とか、13万円とか、22万円とか。きびしい。街ゆくおばちゃんをみて、ああ、この人は今日も働きにいらしていると思う。阪神タイガースが勝って、関西では大騒ぎや元気を出す人が多い。「庶民」って図太いと思う。僕は抽象的な悩みに囚われてちゃダメだなと再確認する。甘チャンの観念遊びじゃなく、コジコジのような感覚で、生活に繋がることをちゃんと考え実行していこうと思う。

僕は、この数年、自分を見つめて、だいぶ前より相対化できるようになってきた。

以前は、そうした「庶民」のおっちゃんらが、何も考えんと、その日その日、あれやこれや文句ゆうて、悪口いって、笑って、泣いて、という人生スタイルを送っていることに、今以上に批判的やった。無意識に「下」にみていたんだと思う。

もちろん、そうでない感覚ももっていて、インテリではない庶民の生活のしたたかな防衛みたいなところをベースに労働運動や大衆運動に希望を見出していたのも事実。そもそもマルクス主義が労働者階級を希望の主体とみなすのもそういう視点があるからだし（ある種の庶民＝大衆＝労働者階級賛美）。だから本心で、「見下す」という感じをもっていなかった。自分もただの人間で、フルーの庶民で、うまいもん食ったり、つまらん話をして笑っていたりしているということに、なんか安心もあった。フツウの人々が優しい気持ちで家族を営み、友人や同僚と生きているのをほほえましく見つめる目ももっていた。多くの専門家も自分の私生活ではちょぼちょぼやったし。映画やマンガや小説や音楽の中で、そのパワーに感動するのも、庶民の豊穡さの方だった。

でも、でも、マルクス主義にしろ、先生や政治家にしろ、そういうことを言いながら、心の奥底で庶民を「無知で、いいかげん」と「蔑視」しているから、今のようなスタイルになってんじゃねーかと思うと、それって、俺もじゃん、って気づく²¹⁾。つまり、庶民を見つめる目が分裂していて、上からみるとときと、同列になっているとき（あるいは時には過剰に美化するとき）との矛盾した両面を、僕を含めた「専門家・インテリ層」はもっている。僕はもっていたし、今でももっている。

でもそこを深く追求せず、多くの人は自分の「意図の純粹性」で思考停止する。政治家しかり、弁護士・学者しかり²²⁾。「もっと考えて、リスクを減らして、合理的に生きて、そして社会的な活動もしたらいいのに」と思い、そうならないのは、人間のだめさもさることながら、今の政治や社会のシステムが悪いからやと思って、それを変えなあかんという回路で、多くの人も僕も思考をとめてきたと思う。

また学者や運動家によくみられるのは、自分と異なる意見について、そんなんじゃ

21) 「バカな一般大衆に憤る（絶望主義）」のも、「宣伝すれば、すぐに大衆は賢いから広がる（啓蒙主義）。そうした大衆運動で社会を変えよう」というのも、根本に、大衆蔑視がある。

22) もちろん、こんなことを言うからといって、これまでの運動を否定するつもりはない。むしろほとんどの運動は、そうした矛盾を抱えつつも、現実の中で専門家とそうでない人、リーダーとそうでない人との見直しがすすんできた。

ダメだよととても攻撃的になって、自分のほうが正しい、賢い、よく見えていると、理論上の論争をして優位に立つことにエネルギーを注ぐ傾向だ。上からの見下しの視点だった。これも硬い。

で、〈スピ・シン主義〉としては、そうした硬い分裂をそのままにしないでおこうと考えたんだ。前は個別的には〈混沌の闇世界〉の力をみて庶民をふつうにみている、いわゆる理論的な面では、そこと切れていて、啓蒙主義的な視点を捨てきてなかったなあと思う。〈スピリチュアリティ〉とか〈たましい〉とか「闇」とか「俗」というものを自分のなかにみるようになって、認識の中に入れるようになって、合理主義以外の「混沌の闇世界」に目が行くようになって、人間って、俺も含めてそうやん——完璧じゃないし、矛盾もあるし、「混沌の闇世界」も入れれば、僕のいつていることだけが正しいわけじゃない——と、見直せるようになってきた。「庶民」賛美と「庶民」蔑視という分裂のままではなく、〈混沌の闇世界〉の視点によって人間を理性と非理性の統一体と捉えることで、庶民への「見下し」でも「過度の美化」でもなく、心から「自分と庶民」をつなげて捉えることができた。

そのバランスは、「庶民」というような形でくくって他者を捉えるのではなく、個別個人を瞬間において大切に捉えるってことかな。「庶民」というようにさえ考えない、固有名詞で僕自身を考えれば、僕は決して「どこかにあるような典型的な庶民＝市井の人々」ではない。僕は僕なのだ。そしてAさんはAさんであり、BさんはBさんなのだ²³⁾。そしてその個別性に応じて、AさんやBさんや自分に、言いたいことを言い、言っても仕方ないこと、言う必要のないことは言わなければいいということ。

23) 友人が、僕の「庶民」考察がらみで、メールを送ってくれた。

「ときどき思い立った時に行く寿司屋があるんだけど、そこを勝手に「くだまき寿司屋」と呼んでるの。東京は深川。昔からの芸者街。職人たちが遊ぶ街で、宮部みゆきの江戸もの小説に良く出てくる舞台なのだけど、その街、そしてその寿司屋はスゴイよ。そこに行くと、みんながクダ巻いてるよ。「なんだっつーの、だいたい……さんが、わたしのなんとかでなんとかで」「そんな借金、払えないっつーの……」「おれの酒が飲めないっつーのか」。その寿司屋に行くと、私もまだまだだ、と感じるの。私はクダも巻けないスカした人間よねえ、って。でもその瞬間に自分がアホみたいに感じるよ。市井の人になりたい、というのは、実は大変な思い上がりな話して、そんな風に、クダも巻けない私はやはり、同じように市井の人なのに。」
彼女がそのようないうバランスが好きだ。

そして思考の先に行き着くのは、人をあんまり批判せず、ふわーと、自分のしたいことを楽しくマイペースでやっていこう、したいと思ったことはすぐにやろうということ。だから会いたい人とは会う。したくないことはしない。そうなると、コジコジじゃん、って感じ。他人や自分のこともあまり深く暗く上から理屈っぽく考えず、あまり情報を取り込みすぎず、少ない情報の中で、自分を肯定して楽しくやっていきたいなあということ。

コジコジのお気楽バランス

これは、以前は、もっと自信に溢れ、世の中の悪いこと気に食わんことをすべて片っ端から切り捨ててやろう、相手にしてやろう、時間さえあれば全部勝ってやるという感じだったが、いまじゃ、なんか気に入くわんことはいっぱいあるけど、それに付き合っただけで自分がしんどくなったり、攻撃的になって消耗するのはダメだなあという感じに至ったってことでもある。自分には才能や能力もあんまりないし、それでいいやという感じ。有名になるとか皆に称賛されなくてもいいじゃんとおもうと、マイペースって思えた。人は、多面的で、ダメなところもあるけど、いいところもあるじゃんって感じ。

介護でも、体を拭いたり食事介助したり、着替え、代筆、いろいろするのもしんどいし、その合間合間の効率の悪さ、無駄な時間というものをしんどいってこれまで思っていた。(もっと有効に時間使いたいなあ、本読んだり仕事したりしたいなあ、と。) 身体的なだけでなく、精神的にも負担感があること多かった。自己犠牲って感じ。でもコジコジの気持ちになると、そういう「自分の外」のことは、「外」のことで、自分の気持ちの中で、「人生なんてこんなもんさ、フンフンフン」と鼻歌を歌って、「次はなんですかあー」と思考を停止して間抜けていると、なんだか楽しかったし時間もいやじゃなく楽しく過ぎた。まあ、簡単に言えば、歌を歌ってれば、楽しい気分ってところ。だって、人生でやっていることって、別に「意味あること」ばかりじゃないじゃん。本を読むことは意味あることなの？ お金を稼ぐのは意味あることなの？ テレビをみるのは？ 散歩は？ ってこと。

つまり世界(自分、他人、社会)の重み(=暗いところ、つらいところ)をいつも背負ってるとしんどいなあと思って、軽く「自分ひとりであせってもしゃーない」という感じに至ること。そしてひとつひとつの中に、今、この瞬間、人生を楽しんでる、

楽しむとまでいかなくとも、まあ、ちゃんとすごしているなっるのがあればいい。そしてもちろん、だからといってエゴになったり世界に無関心というわけじゃない。

それがコジコジのバランスだとおもった。僕が目指している〈スピ・シン主義〉のバランスがコジコジと少し似ている気がした。

心ゆれてあたりまえ。人と比べて自信なくしてあたりまえ。輝く人みて、自分はダメだとおもって、元気なくなってあたりまえ。せこいこと考えてあたりまえ。「特別の才能もない庶民」ってみんなそんな中で何とか楽しく頑張ってるんじゃないの。僕もようやく、自分が自分になれたってこと。「迷うのはあたりまえ。純粹に完全にはなりきれない」ってことに、以前の元気な僕はあまり慣れていなかった。落ち込みもほとんどなく、自信あって、うまく生きてると思っていた。他の人の悩み方が不思議だった。何であんなに悩んだりするんだらうって。

でも、僕は徐々に弱くなって、まともになって、見えてなかったものが見えてきた。人に優しくありたいとか世界の戦争や虐待に心を痛めるのも本当。でもそれだけじゃなく、自分には何もできないと無力感をもち、人を羨み、お金や名声や恋人やといったものにもひきつけられ、俗っぽくて、努力ができないという面があるのも事実。僕は後者をあまりにもみていなかった。

洗練されたアートとか、成功した人とか、なんか先端をいってる人ばかりみると疲れる。多くの人は、自分にはできないと思って、疲れたり、かえって自信をなくす。でも、情報を少なくして、比べず、自分の基準で自分なりのアートのことを楽しめばラクチンで楽しい。コジコジはそんなスタイル。

じゃあ、どう生きるか

2001年6月9日、テレビで、食道ガンで余命半年といわれた経済学者が語っていた。昔は銀行員で、その後ウォール街の金融マンで、大もうけしたが、旅行で出会った人に、虚業ですねといわれて、子どもに説明するとき、中身がそうなのだと気づいた、と。だから、娘にその子が人生を選択するとき、父親である僕がいなくてもちゃんと生きていけるような社会になってほしいと思って、学生に教え、社会に提言するのが残された仕事だといってがんばっていた。その後しばらくしてその人はこの世を去った。だが、テレビはそのことを当然、「1コマのエピソード」として消費し、同番組もその後も何もなかったように相変わらず、景気がどうだ、有事がどうだと非スピリ

チュアルに騒いでいる。

人は死ぬ前に、まともになっていく。僕はこれを見て、疲れていた自分に少し元気が出た気がした。そうだ、やっぱり僕も、「死ぬ前」「死に至る過程」なのだ。だから、残された時間を有効に、使いたい。気持ちよく、悔いなく使いたい。つまらないことに時間を使ってられない。まともな友人たちと「仕事」をすればいい。そう思うと元気が出た。

それに、心や体からの信号ということにちゃんと向き合いたいと思う。この数年、気分には何かもやのようなものがかかっているし、スウェーデンで、耳鳴りがしたこともあった。周りに不思議なほど精神的にしんどい人、鬱的な人が多くなってきた。緑内障にもなった。腰痛にもなった。「40肩」にもなった。それらは、言葉でない水準で、僕に伝わってくるメッセージだ。

具体的に後半の人生をどうするかは、具体的にはわからない。いろいろな可能性があり、変化しつづけることだろう。どうなるかはオープンだ。カネ・安定よりもやりがいという結論は出ているので、多分、硬い組織（時間的にも精神的にも縛られる状況）から出る、あるいはそれに関わる時間を極力減らし、あらゆる活動において新しい〈スピ・シン主義〉的な試みを組み込もうとチャレンジし、なんらかの社会運動、NPO的活動といったものに〈スピ・シン主義〉を意識してかかわることにはなるだろう。知性とスピリチュアルな深い感覚に裏打ちされた深い思考から発せられる言葉を出し、実践して生きていきたい。それは自分の「人格改善」の連続であり、まともな人に近づくという実践だろう。

しかも、いい人としておとなしく精練潔白に生きたいというんじゃない。逆に、ブンブン自由に生きたいなあと思う。行き着く方向は、OUT！

それから、あせらない、一生というタイムスパンで長期的にやればいいじゃんというようにも、思う。厳しい社会環境が予想される中、僕自身にも、僕が愛する人々（世界中のまともな人たち）にも、サバイバルするのが大事だよ、あせらなくていいよ、自分を大事にねといたいと思う²⁴⁾。

24) 僕はサバイバルしたい。あまりに鈍感で、いやらしい世俗的な感覚が多すぎる。そうではなく、自分がすごいと思う人やものに触れて、生きていきたい。極端に言えば、

したい活動の要素として、書きたいことを書く、ユニークな本を作る、いろんな人に会いに行く、日本中を回っていろんな面白いことに参加し体験する、体で自然に触れるような時間を作りたい、肉体労働的な意味合いも含めて実践的（直接性、身体性）に人に関わることをする、そのことを書く（写真も入れて、ノンフィクションライターの）、自分でアート作品的なものを作る、そういうことを通じてチャレンジし続ける、シングル単位的自立の援助をすすめる、未来の人間関係の雛型を実践する、スピリチュアルな水準で活動する、皆とワークショップ的に学びあう、教育プログラム作りといった、僕の得意分野である「教育」「語りかけ」関係の要素（自由学校的なもの、各地学習センターへの企画売込みによる参加）、インターネットを活用した発言の確保、等は入ると思う。貧しくてもいいから、社会変革とのつながりをもつこと、尊敬できる仲間がいることがあればいいなと思う。

定期収入という足場がなくなると、媚びたり、売名的になるのではないか、という心配はあるが、でも、やってみなくっちゃわからないという面もある。「定職」（収入があることとやるべきことが決まっているという安心）という安定が必要な人や段階もあるだろうが、自由に生きるために、そこから離れるというのもありだ。人生は確かに大変だが、どうせ大変なんだし、自分が自分でありつづけるための何かがあれば、生きていける。いろいろ考えて、〈スピ・シン主義〉というようになったんだから、無名で、収入もないというところから、考えていったらいい。つつましくていいから、自分で心豊かに生きてるなど思える生き方をするしかない。

これまでの運動の批判とか、他の人と比べてどうだというんじゃなく、僕は自分がいいと思うものをどんどんしたいと思うようになった。人や社会が動かないのを嘆いているのでなく、少しの人とでも自分だけでも動こうと思う。自己満足というより、そういう人がいるということを見せていくしかない。いけるところまでいくしかない。そう思うと元気が出た。

厳しい状況のとき、疲れたとき、元気がないときなどは、自閉して、自分が美しい、気持ちいいと思うものや人に囲まれて暮らせばいいと思う。自分と同じ感覚の繊細な人たちと楽しく暮らしたいと思う。いろいろ社会的なことをやっている人がいるから、それには応援すべきと思うが、まじめに狭く短期的に考えすぎて、しんどくなってつぶれちゃったらなんにもならないから。自分は何をしたいのかを時間をかけて見つければいいと伝えたい。

「遙かな山から吹きつける風に／ひれ伏しながら／けして折れはせぬ／押し寄せる
雲から打ちやまぬ雨に／ひれ伏しながら／けして折れはせぬ／私になりたいものはと
いえば／地下に根を張る あの竹林／月の日 火の日 水の火 木の火 金に踊って
土と日に還る／私が住みたい国はといえば／地下に根を張る あの竹の国」(中島み
ゆき「竹の歌」)

善く生きることが「僕にとっての価値」なのであり、自分が動けば世界に影響を与えているのだというスピリチュアルな感覚で、小さな、しかし確かな一歩を踏み出し
つづけたい。

文献

- 伊田広行 [1997]「関西でのウーマンリブとフェミニズムの動向」大阪社会運動協会編
『大阪社会労働運動史』第7巻所収
———[1999]「スピリチュアル・シングル——生き方と社会運動の新しい原理を求めて
——」『大阪経大論集』50巻第1-3号
———[2002]「新しい人権へ」『大阪経大論集』53巻第2号
———[2003]「新しい社会運動の模索」『大阪経大論集』53巻第5号
松井洋子 [1999]『癒しのボディワーク』メティカ出版
森岡正博 [2001]『生命学に何ができるか』けいそう書房
さくらももこ [1995]『コジコジ①~③』ソニー・マガジズ・コミックス
高岡よしこ, ティム・マククリーン [2001]「エニアグラム」諸富祥彦編著『トランスパー
ソナル心理療法入門』日本評論社
立岩真也 [1997]『私的所有論』けいそう書房
(本稿は、2002年度大阪経済大学特別研究費による成果の一部である。)